指定研究

「西本願寺宗意惑乱一件」文書を読み解く（第一年次）研究報告

主任　平田厚志

研究員　龍渓章雄
三栗章夫
川村覚昭
知名定寛
大原誠
三嶋信
事務担当　髙山嘉明

史料紹介

「西本願寺宗意惑乱一件」文書

「一　享和元酉年　従十一月　同三亥正月迄」

解題

龍谷大学大宮図書館に「西本願寺宗意惑乱一件」と題する全十六冊からなる和綴じの古文書（写）が所蔵されている。まずは全冊を列挙すれば、次の通りである。

一「一　享和元酉年　従十一月　同三亥正月迄」
一「二　享和三亥年　従閏正月　三月迄」
一「三　享和三亥年　従四月　九月迄」
一「四　享和三亥年　従十月　至十二月迄」
一「五　享和四子年　従正月　二月迄」
一「六　文化元子年　四月　五月」
一「七　文化元子年　従六月　八月迄」
一「八　文化元子年　従九月　十二月迄」
一「九　文化二丑年　従正月　六月迄」
一「十　文化二丑年　従七月　十二月迄」
一「十一　文化三寅年　従正月　七月迄」
一「十二　文化三寅年　七月　八月」
一「十三　文化三寅年　同四卯年迄」
一「十四　文化五辰年　従正月　至五月」
一「十五　文化六巳年　従四月　至十二月」
一「十六　文化七午年　従四月　至同八未年」

本文書は、「三業惑乱」騒動が発生した享和元年（一八〇一）から、騒動が一応の終結をみる文化八年（一八一一）までの期間に記された騒動に関する種々の文書を、惑乱終結後に時系列的に全十六冊の和綴じ冊子に収録したものである。収録されている各文書群からして、正統安心と判定された反三業派（古義派・聞信派）の立場から編集されたものであることは間違いないと思われるが、「三業惑乱」騒動の全容を解明する上での基本史料であることに変わりはない。本文書の解読と翻刻は「三業惑乱」研究にとって不可欠であり、本研究班としては真宗教学史・教団史・教育史・思想史の立場から読み解いて行こうとするものである。

ところで、本稿においては、とりあえず昨年度に解読を終えた「一享和元酉年　従十一月　同三亥正月迄」分について、史料紹介という形で昨年度の研究報告としたい（当初予定していた頭註・補註は、本報告では省略し、史料の翻刻のみとする）。第一冊目には、騒動が本格的な騒擾期に突入する享和元年～二年（一八〇一～〇二）にかけて、騒擾の前面に名乗り出た美濃古義派の動向を詳述した文書群が主たるものとして収載されている。「三業惑乱」騒擾史の全体的な印象からすれば、安芸反三業派の末寺僧侶の動向が本流で、彼らが古義派の主役のように見られ勝ちであるが、『本願寺史』第二巻でも指摘しているように、享和元年当時、彼らの「京都往反は自由を束縛されていたし、国内に新義派の僧俗がいなかったので、さまで騒擾がましきことはなく、ただ学的の反撃に終始して」（三七六～三七七頁）いて、享和元年・二年の主役は、何といっても美濃古義派僧侶・門徒であった。享和二年、美濃国大垣藩領の古義派法中・門徒百姓は、多数の同志を糾合して二度にわたる示威行動を起こし、その決起が直接的な契機となって本山は幕府寺社奉行の「察当」（違法行為をとがめること）を受ける羽目となった。すなわち、まずは享和二年正月、糸貫河原に古義派数千人が、ついで七月、青野原に数百人が群集して騒ぎ立てたのであるが、この古義派の蜂起が大垣藩主を動かすことになった。大垣藩は、領内に幕府預所・領地・分地を抱えるという特殊事情があり、かつまた藩主戸田氏教は幕府の現役老中であった。従って、この騒動は藩として黙認しえず、藩より幕府勘定・寺社奉行へ報告されるであろうことは必至であった。こうした藩の立場を見越して大垣藩内本願寺古義派の連中は、新義派に牛耳られていた学林教学・本山宗政を、古義派こそが「御正義」とする宗意安心を取り戻すためには、幕府権力と密接な関係にある大垣藩内で、法義を糺す示威行動を起こして藩当局を動かし、幕府の強権を梃子に本山に圧力をかける方法が最も有効であるとの計算が働いていたことは否定できないであろう。

本山当局としては、一宗が「安心二途」に分かれて相反目するという教団の混乱状況を、早急に収拾すべく重い課題を突きつけられたわけで

あるが、もとより自失茫然の本山が動けば動くほど事態は悪化し、ついに混乱の舞台は京都本山に持ち込まれるという最悪の結果を招いてしまった。かく自浄能力を喪失していた本山当局は、文化三年（一八〇六）にくだった本一件に対する幕府寺社奉行の裁定をうけて、ようやく古義派を「御正義」とする立場で、収拾のための「御裁断御書」を提示することができたが、俗権の威を借りなければ教団内の混乱を収拾できないほど、没主体的な宗政の実態を天下に晒してしまったのである。

ともあれ、美濃古義派は、法中と門徒百姓が共通の安心理解に立って新義派に対峙するとともに、領国内の新義派の一掃を本山に迫るに当って、藩・幕府の寺社奉行を巧みに味方につけて、本山に自らの要求を突きつけるという方法で局面を打開しようとした。これが美濃古義派騒動であった。美濃古義派が、享和元年二月に本山より摂州十三日講宛に下付された「御裁断書」にこだわり続けたのは、その「御裁断書」の内容にそれほどの関心があったからとは思えず、むしろ「御裁断書」に象徴される本山の優柔不断性を糺し、本山としての主体性の回復を促すことに主たる目的があったと思われる。もちろん、当時の本山当局にはそれを期待すべくもなかったが、幕府寺社奉行が「宗義」問題にまで介入してきたことにより、ようやく本山当局も「宗門之一大事」に気付きはじめ、宗意惑乱の現状に何らかの収拾策を考えざるを得ない事態に追い込まれていったのである。その意味で、美濃古義派騒動は、美濃古義派法中・門徒農民の戦略的勝利と見ることもでき、それ以後の「三業惑乱」事件の展開を、古義派有利に導く先導役を果たしたと見ることもできよう。

（文貢　平田厚志）

凡例

一、底本の形態を可能な限り残すことにつとめたが、本文の改行は底本によらず、翻刻者が適宜行なった。また、読みやすくするために本史料には句点（、）並列点（・）を付した。

一、漢字はなるべく常用漢字とするようにつとめた。ただし、人物名・寺院名については、原文の表記のままとした。また、江（え・へ）、茂（も）、而（て）、者（は）、与（と）、ゟ（より）、ゝ（くりかえし）など、使用頻度の高い変体かな・俗字・合体字もそのまま残した。

一、欠損文字は□で示した。ただし、別の写本や関連文書から、欠損部分の文字が判明する場合は、その文字を（　）内に傍記した。また、明らかに誤記・誤字と判断される箇所には、（ママ）、あるいは該当すると思われる文字を（カ）と傍記した。

西本願寺宗意惑乱一件

西本願寺宗意惑乱一件　一

同三亥正月迄　壱

壱　一西本願寺派宗意二途ニ相成候付、戸田采女正殿御預所役人より窺出候儀ニ付、菅沼下野守ゟ問合

弐　一戸田采女正殿御預所役人より濃州村ゟ西本願寺宗意之儀ニ付、御勘定奉行江差出候書付

三　一戸田采女正殿家来ゟ右宗意之儀ニ付、取計問合書并下ヶ札

四　一濃州辺末寺之内ニ而、宗意心得違説法いたし候もの有之候儀ニ付、輪番光恩寺江相尋候趣書取

五　一前書尋之趣ニ付、差出候輪番とも答書

享和元酉十一月与梨

六　一采女正殿家来ゟ問合之儀ニ付、内同人江申上候趣書取之趣書取

七　一濃州表百姓共宗意之儀ニ付申争候趣、采女正殿家来ゟ猶又差出候問合書　拾四　一争論一件ニ而出府之面々帰京願之義ニ付、輪番共ゟ差出候書付

八　一右同断之儀ニ付、采女正殿御預所役人ゟ御勘定奉行江取計方伺出候付、菅沼下野守ゟ問合　拾五　一濃州村々宗意之儀ニ付、不穏趣采女正殿御預り所役人ゟ申出候儀ニ付、石川左近将監ゟ之懸合書

九　一采女正殿御預所役人より御勘定奉行江差出候濃州村々宗意取治ニ付伺書　拾六　一采女正殿御預り所役人ゟ御勘定奉行江差出候濃州百姓共宗意惑乱之儀ニ付伺書

十　一右同断之儀ニ付、菅沼下野守江懸合候趣并同人ゟ差越候答書　拾七　一采女正殿家来ゟ右同断ニ付、差出候問合書面

十一　一宗意之儀ニ付相尋候趣、京都江申遣、申越候趣輪番共ゟ申出候書付　拾八　一右問合之儀ニ付、輪番光恩寺江取治方之儀ニ付相達候書付

拾九　一宗意之儀ニ付、追々尋之趣京都江申登申来候趣、輪番ゟ申出候書付

十二　一輪番共差出候酉年十二月直裁断書付　廿　一輪番光恩寺差出候美濃国法中惣代ゟ本山江差出候伺書写

拾三　一采女正殿家来江口達之趣書取并輪番江猶又相達候書付口達

廿一　一同寺差出候采女正殿京都表留守居ゟ本山江懸合書写

廿二　一同寺差出候本山役人ゟ采女正殿京都留守居迄答之趣手扣写

廿三　一采女正殿家来ゟ濃州表百姓共騒立候儀ニ付、問合書面

廿四　一御同人家来ゟ差出候濃州表江西本願寺ゟ被差向使僧江、法中共差出候願書并伺書写

廿五　一西本願寺ゟ濃州表江使僧被差向候義ニ付、采女正殿御預所役人伺書差出候儀ニ付、石川左近将監ゟ之問合

廿六　一御勘定奉行江采女正殿御預り所役人差出候宗意之儀、寺地并門徒とも願筋申立候儀ニ付伺書

廿七　一濃州村ゝ西本願寺門徒宗意心得方之儀ニ付、取計方伺書通達

廿八　一京都本山ニ而能化并八僧臈満与相唱候訳、且義絶与申もの寺号申出候書面類

廿九　一濃州村ゝ西本願寺派僧俗宗意心得方之儀ニ付、輪番江申渡候趣申上候書付

卅　一西本願寺輪番江申渡書案

卅一　一備前守殿秋山松之允を以輪番江申渡書案之儀ニ付、猶又取調可申上候趣被仰聞候趣

卅二　一濃州村ゝ西本願寺派僧俗宗意心得方之儀ニ付、輪番江申渡候趣申上候書付

卅三　一西本願寺輪番江申渡案

卅四　一輪番共内寄合江罷出候様相達候趣

卅五　一酉十一月十八日輪番江申渡書付并役人共ゟ申聞候趣

卅六　一内寄合ニ而申渡候趣ニ付、輪番光恩寺上京届書付

卅七　一輪番光恩寺出立之趣相届候書付

卅八　一右同断ニ付廻し小札秋山松之允江懸合之趣

卅九　一永井山城守家来ゟ宗意惑乱之儀ニ付、領分之寺地上京之儀ニ付、問合并答下ヶ札

四十　一興正寺使僧三光寺差出候書付

四十一　一輪番光恩寺京着届

四十二　一輪番光恩寺京都出立届

四十三　一戸田采女正殿家来江西本願寺ゟ濃州表江被差向候使僧引払候届

四十四　一輪番光恩寺帰府届

四十五　一輪番光恩寺ゟ此度御伺之通、浄教寺義御門跡ニ而御取計有之候ハヽ、同志之者騒立候趣ニ付、京都町奉行江通達候義伺書

四十六　一同寺差出候口上手扣

四十七　一同口上覚書

四十八　一同法義筋差縫趣意書
但不相分候ニ付、調置ニ相成候故、銘書計也

四十九　一同伺書
但同断

五十　一輪番光恩寺差出候去酉年十一月十八日申渡候趣答書

五十一　一同宗意之訳書

五十二　一同法義筋差縫趣意書

五十三　一同被取計方伺書

五十四　一光恩寺出府之儀ニ付、秋山松之允江相咄置候心覚

五十五　一浄教寺差出候入門六条

五十六　一帰命弁入門六條之内、三業与申立候廉相尋候趣光恩寺答書

五十七　一宗意一件取調之儀ニ付、同役衆ハ演説之趣書留

五十八　一三業方聞信方諸国ニ而帰依之多少相尋候趣答書

五十九　一輪番光恩寺ゟ差出候美濃国罷越候使僧江門徒差出候書付写

六十　一同直命之書

六十一　一改悔文・御文章

六十二　一摂州十三日講江之高判写

六十三　一浄教寺智洞西念寺諦恩江酉十二月門跡申渡候咎筋之書付

酉十一月廿三日

一菅沼下野より左之達書於御城請取、同廿六日答下ヶ札相達

脇坂淡路守殿　　菅沼下野守

別紙之通戸田采女正殿御預所役人書面差出候付、如何可申渡候哉、濃州辺者西本願寺宗茂多人数御座候間、騒立候も難計候付、早ゝ差図有之候様仕度旨御預所役人申聞候、依之別紙相添及御懸合候、以上

十一月

御書面之頃(ママ)令承知、別紙采女正殿御預所役人差出候書付一覧いたし候処、西本願寺役僧教化方之儀ニ付争論有之、当時本山糺中之由、右ニ付門徒共心得も両様ニ引分レ、互ニ非謗いたし候得共、本山糺中故容易ニ宗意申解候ものも無之、□□同意候触頭江預り門徒ニ相成度趣等可申出様子ニ付、右躰申出候節

之取計并本山非分と心得、或師匠寺之教をも不相用族有之程之儀ニ付、愚昧之者共立騒候儀等出来可致哉も難計ニ付、各方江も相伺候上、利害申聞度趣意と相聞申候、右教化筋争論之儀者拙者共方江西本願寺ゟ申立等も無之義故不相分候得共、宗意之義者本山御吟味可任筋ニ付、本山糺中百姓共彼是申争候迚可相分謂無之者勿論之儀故、本山糺相済候を可相待旨百姓共江得と利害申聞、預り門徒ニ相成度趣等申出候共、是以難相成筋ニ付、其段得与申宥置候様、猶御勘弁之上御差図有之候方被存候、且右争論ニ付門徒共を本山又者師匠寺江留置、咎申付候趣も相見申候、右門徒之有て候者旦家之儀と存候、左候得者本山等ニ而咎申付候者筋違之儀ニ付、弥右之通相違も無之哉、猶御預所役人江御尋有之候方被存候

酉十一月

濃州村ゝ百姓方西本願寺宗意之儀ニ付申上候書付

戸田采女正

御預所

西本願寺役僧教化方之儀ニ付、於本山争論有之、以前ゟ之宗意与心得申教候末寺之内咎を受候僧俗も有之、糺中之由相聞申候、右僧俗之心得同意之門徒共者師匠寺本山ニ被差留、咎ニ相成候段本山非義之様相心得、或者末寺之内ニ而も役僧之申解候宗意を旨と心得、門徒江申教候も有之、同師匠寺之門徒共ニ而も心得方ニ様引分レ、相互ニ非謗仕、既ニ私領之内ニおゐてハ師匠寺之宗意相違之由申立、安心之儀得意相成候様申聞セ呉候様申懸候得共、容易ニ宗意申解候而も争論出来可仕哉与遠慮仕候歟、何れとも不申解趣ニ御座候得者、役僧心得同意之触頭江預り門徒ニ相成度由申懸候も有之、御預所之内ニ而茂右之通相揉候ニ付而者御政事ニも相拘り候儀出来可仕哉と不安心ニ存、届主上京仕候寺院茂御座候、一躰美濃国者本願寺宗多、別而御預所村ゝ之儀者過半西本願寺宗ニ而、右揉合より自然与農業も怠り候哉ニ相聞候得共、本山糺相済候上者いつれを是とも難取極筋ニ付、若御預所村ゝゟ此節外預り門徒ニ相成度旨等申出候も、本山糺中百姓方ニ而右等之儀申立候者、心得違之旨申聞差押候心得ニ御座候、前件之趣ニ而本山之非義と相心得、或者師匠寺之教をも不相用族有之程之義ニ付、心得違不仕候様追ゝ利害ハ申聞候得共、全躰聊之心得方ニ

而後世ニ拘り候儀、片時も難捨置儀ト一途ニ存詰候もの共故、此上本山糺長引候ハヽ、本山又者師匠寺江対し愚昧之者共万一立騒、御政事ニ差閣候儀出来可仕茂難計御座候間、本山糺相済候上者、役所向ニ而何れとも宗意不相弁義故、一通り利害申聞候迄ニ而ハ百姓心服仕間敷ニ付、此上之儀者右御達申上置候訳を以申示度、尤右ニ付取計方も御座候ハヽ、御差図被成下候様仕度旨、濃州役人共ゟ申越候ニ付申上候、以上

戸田采女正家来
井上庄次郎（印）

酉十一月

十二月廿日

一采女正殿領分西本願寺派宗意之儀、家来ゟ問合之儀も可有之候間、承置呉候様被仰聞候、帰宅之上其段役人江申聞置之

戸田采女正家来
井上庄次郎

一左之書面

壱通差出候

三

但答下ヶ札戌二月廿三日遣之

戸田采女正家来
井上庄次郎

西本願寺役僧説法之儀ニ付、争論祖師ゟ之宗意与心得説法仕候末寺之内、於本山咎を受候僧俗も有之、糺中之由ニ而、右僧侶之心得同意之門徒共者、師匠寺之本山ニ而咎に相成候段、本山非分之様ニ相心得候茂有之哉者、末寺之内ニ而も本山役僧之説法之意を宗与相心得、檀那之百姓共江申解候も有之、同寺檀那之百姓共ニ而も宗意古義方・新義方与両様ニ相成、相互ニ誹謗仕候茂有之趣ニ御座候、然処采女正領分中百姓共ニ茂西本願寺宗多く有之、別書之趣ニ而彼是申合仕、自然与農業も怠候程之義ニ付、何れ歟本山ゟ理非可相分間、心得違不仕様役人共ゟ追々理解為申聞置候得共、愚昧之者共之儀、宗旨違乱仕候而ハ、後世を取違候大切之儀と一途ニ存詰候様子ニ付、本山又者檀那寺江対し、万一大勢騒立候様之義も出来可仕哉ニ相聞申候、本山之糺

相済、理非相分不申候而者難取捌筋ニ御座候故、一通理解
為申聞候上ニ而ハ心服仕間敷、此上本山之糺方長引候ハヽ、
百姓共騒動ニおよひ可申も難計御座候、右ニ付取計方之儀
如何可仕哉、兼而心得ニ御問合申上度奉存候、以上

戸田采女正家来
十二月廿日　井上庄次郎

書面西本願寺末寺共之内、心得違之教化いたし候
故、旦家之百姓とも騒ゝ敷相成候趣ニ相聞申候、右
教化方之義者本山吟味中之事故早ゝ相糺、心得違之
末寺ともハ夫ゝ申付本山江願出候、百姓共江茂利害
申聞、帰村為致候ハヽ相治可申筋与存候間、宗意心
得違之末寺共并上京いたし罷在候百姓共をも、本山
ニ而夫ゝ教誡之上、帰村為致候様本山江可申遣与輪
番江申渡候間、御領分村ゝ百姓共江も本山之糺相済
候之上、旦家之もの共得心難致義も有之候ハヽ、其
節可願出筋之旨利害被申聞、却而騒ゝ敷相成可申様
子ニ候ハヽ、其訳本山役人江懸合、廻村之義被相断
候而も不苦筋被存候
戌二月

四

十二月廿一日　築地本願寺輪番

一依召参上左之書取之趣相尋　光恩寺

濃州辺末寺之内、宗意と心得説法いたし候もの共咎請候僧
侶も有之、当時糺中之由、右僧侶心得同意之門徒共者、師
匠寺之本山ニ而咎ニ相成候を、非分之様ニ相心得候も有之、
或者末寺之内尓而本山役僧之説法を宗与心得、門徒之百姓
共江申解候も有之、門徒之内ニ而宗意古義方・新義方与両
様ニ相成、互ニ誹謗いたし、彼是申合、自然与農業も怠、
檀那品ニ寄騒立可申哉も難計、甚不穏趣ニ候
右者如何之訳ニ候哉、宗意心得違之ものニ而も有之、咎等有
之哉之事

十二月廿三日　築地輪番
　光恩寺
　正定寺

一左之書面壱通差出之

濃州辺末寺之内、宗意与心得説法いたし候もの共咎請候僧

倡茂有之、当時糺中之由、右僧侶心得同意之門徒共者、師匠寺之本山ニ而咎ニ相成候を、非分之様ニ相心得候も有之、或者末寺之内ニ而本山役僧之説法を宗与心得、門徒之百姓共江申解候茂有之、門徒之内ニ而宗意古義方・新義方与両様ニ相成、互ニ誹謗いたし、彼是申合、自然与農業も怠り、品ニ寄騒立可申哉も難計、甚不穏趣ニ候

右者如何之訳ニ候哉、宗意心得違之ものニ而も有之、咎等有之哉之事

右御尋之趣承知仕候

一濃州辺僧侶法義筋之争ひ候儀も御座候由之風聞承候得共、末寺共於本山咎を請門徒共騒立候与申義ハ、本山ゟ未申来候、何之訳哉不奉存、申上様も無御座候

一本山役僧と御座候者、国ゝ江被差出候使僧之義ニ而可有御座、何れ本山役者共御門主使僧相勤候義ニ御座候

一於宗門一派ニ古義・新義と申儀ハ曽而無御座、御門主代ゝ相承之安心一途ニ御座、(錯脱カ)若し心得違候族御座候節ハ、本山ゟ被及吟味候儀ニ御座候、何分前段申上候通不案内之義ニ御座候故、申上候程も無御座候、右躰之義者定而子細も可有御座候間、本山江相伺如何之訳と申義御答申上度奉伺候、

以上

(五脱カ)

本願寺築地輪番

十二月　光恩寺

正定寺

酉十二月廿四日采女正殿江口上ニ而左之通申上置候

心覚

(六脱カ)

去ル廿日御家来ゟ問合書面之義ニ付、西本願寺輪番相糺候処、別紙之通申出、当地ニ而者難相分趣ニ付、当京都表江申遣候上可申出旨申使置候間、右申出さる内ハ何れとも難申上、御答及延引候段采女正殿江口上ニ而申上候事

十二月廿四日

享和二戌年

戌二月六日　　戸田采女正家来
　　井上庄次郎

一左之書付壱通差出候

戸田采女正家来
井上庄次郎

采女正領義中西本願寺宗之義ニ付、旧冬御問合申上置候処、此度在所役人共より申越候趣者、右宗意ニ様ニ相成惑乱仕、家内迄も難治旨右宗門之百姓共ゟ申出候由、此義元来本山ニ而二道の有たる(ママ)敷候得共、末寺之内教化方二様ニ御座候故之趣ニ相聞へ、尤右躰之義ニ付、外国ゟ茂本山江相願、御尊判(尚)与申もの申請候由ニ付、近辺之外御領分村ゟ本山江相願候者共有之故、采女正領分右宗門之百姓共も同様相願度旨申出候ニ付、先達而申渡置候通、宗旨之儀者百姓共之彼是可論儀ニ無之、殊ニ本山江願出候儀ハ心得違之旨為申聞、乍然惑乱仕難治之処可治義ニ候ハヽ、夫ゟ檀那寺江懸合可相済旨為申聞候処、右宗意之義ニ付寺ゟ本山江願出候得共、咎ニ相成、帰寺も難相成御座候ニ付、行届不申由申之、愚昧之者共宗意之儀ハ一大事之儀ニ而、暫も難捨置義と存談罷在候故、強而差押候ハヽ相廻り候而騒立可申も難計御座候ニ付、右相願候百姓惣代之者上京為仕、京都屋敷留守居之者召連、本山江罷出、右願之趣意申達置候処、何之沙汰も無御座由ニ而、今以百姓共彼地ニ滞留仕罷在候、然処京都屋敷留守居之者ゟ濃州役人共方江申越候者、宗意一件為取鎮直命之趣ニ而、濃州江役僧被差向候様子承候ニ付、右被差向候而者却而騒立可申哉被存候ニ付、役僧

被差向候儀差留置、百姓共願之趣相済候様懸合仕、且例年被差越候使僧茂、濃州役人共江一応可申遣候上被差越候様仕度、是又暫延引御座候様、本山役人中迄懸合置候旨申越候処、濃州ニ而百姓共申出候者、旧猟(廻)廿七日本山ニ而直命御座候趣も承知仕候得共、御高判不申請候半而者百姓共承引不仕旨申出候故、申立心得違御座候得共、宗意之義役人共相弁不申儀ニ付、得心仕候様為申聞方無御座候、兎角心得違不仕候様申渡置、宗意并百姓共本山江願之趣、何レへ相成候而も、於役人共差構候筋無御座候得共、愚昧ニ而一途之者共故、品ニ寄御作法ニ相拘り候儀仕出可申哉之処、心痛仕候ニ付、京都留守居之者ハ申遣候者本山ゟ為取鎮、直命之役僧并例年之使僧迚も被差越候儀差留候筋無之候得ハ、百姓共相鎮り候様本山ニ而勘考有之、使僧被差越候様仕度、尤百姓共存念之趣御座候ニ付、其段留守居之者承知罷在候故申達候様申遣置候、然処村ゝゟ申出候者、例年被差越候本山之使僧、濃州岐阜并黒野村両懸所江到着ニ付、門徒之百姓共惣代岐阜江罷出、使僧廻村之義断申達候処、否之返答無之ニ付、役人共ゟ差留候様仕度旨願出之、是以難承届筋合ニ御座候得共、変事出来仕候儀難計御座候ニ付、右両懸所江此度之使僧之儀ニ付而ハ、京都留守居之者ゟ本山江懸合前文之趣ニ付、采女正御預所并領分之儀ハ先見合候義とハ存候得共、為念問合候旨申遣候処、岐阜ゟハ本山江伺之上返答可申越旨、黒野村よりハ暫延引之旨返答申越候、然処去月廿三日夜、濃州席田郡糸貫河原江大勢人相集り候ニ付、近辺之村役人共為可制罷出候得者、最早難敗仕候跡ニ而、何方之者共何事ニ而集り候とも不相分候得共、宗旨一件之儀ニも可有御座哉之旨、村ゝゟ注進仕候、依之取締之儀者誠精申渡置候得共、外御領分も同断之趣ニ付、此上何方ゟ誘引仕心得違之者共出来可仕哉、其上使僧押而廻村御座候而ハ、騒立可申義も難計御座候ニ付、先者使僧廻村之儀差留申遣、京都留守居之者ゟ本山役人中迄、右之段及挨拶候様申遣置候由、右之趣在所役人共ゟ申越候、旧臘御問合申上置候処、又ゝ右之趣ニ付、取計方之儀御問合申上度奉存候、以上

戸田采女正家来

二月六日　井上庄次郎

二月九日

一菅沼下野守ゟ左之達書於御城受取、同十三日答下ヶ札相達

寺共、并上京いたし罷在候百姓共をも、夫〻教戒之上帰村為致候様本山江可申遣与輪番江可申渡候間、右之趣ニ御預り所役人も相心得、百姓共江利害申聞、尤此節本山ゟ使僧等被差向候而者、却而騒〻敷相成可申様子ニ候ハヽ、其訳本山役人江委細御預り所役人ゟ懸合、使僧廻村之義相断候而も不苦筋与存候

戌二月　　脇坂淡路守

濃州村〻之内西本願寺宗意難取治ニ付伺書

戸田采女正

御預所

濃州村〻之内西本願寺宗意ニ途ニ相成、采女正御預所之義者同宗多分有之、門徒百姓共差揉候段先達而委細御達申上候処、御附紙被成下候ニ付、其後役人共在出仕候預所村〻末〻之者等、心得違不仕候様申示取締申付置候得共、今以難取治ニ付猶又申上候、元来右差揉候一件之儀者、近来於仏前身口意之三業具足仕、最初可相頼事ニ而其頼候年月日

御書面之趣令承知、別紙采女正殿御預り所役人差出御書付一覧いたし候処、西本願寺末寺共之内、心得違之教化いたし候故、旦家之百姓共古義・新義と引分り、及争論候儀も相聞申候、右教化方之儀者当時本山吟味中之事故、早〻相糺心得違之末寺共ハ夫〻申付有之、本山江願出候百姓共も利害申聞、帰村為致候ハヽ相治可申筋与存候間、拙者方江輪番呼出、右之趣委細申聞、宗意心得違之末

（八脱カ）

脇坂淡路守殿　　菅沼下野守

先達而及御懸合候西本願寺宗意之儀ニ付、戸田采女正殿御預所役人ゟ別紙之通申聞候、此以後門徒共騒立候儀も難計儀ニ付、早速差図有之候様仕度旨申聞候、右一件宗法ニ茂拘り候儀ニ付、如何可申渡哉及御懸合候、以上

戌二月

時等を不覚候得共、信心ニ無之由及教化候寺方有之、門徒共之内ニも相守之候者共御座候由、是を三業方与名付、新義ニ而古法ニ無之、右之通宗意違乱仕候而ハ、村内・家内等も難候治(難治候カ)而古義を相守候者共申之、夫ニ付五畿内辺ニも寺院并門徒共、先達而右等之揉合有之哉ニ而、右国ゝ江者御尊判与唱、御門主御直説之書物ニ判形被附、御渡有之候由ニ而、美濃方之儀も七躰宗意惑乱仕候上者、右同様御尊判被下候様、御料・私領之内古義方之者共、惣代ニ而本山江願出度旨申立候ニ付為申聞候者、宗意之義者寺院之穿鑿可致義ニ而、百姓之身分ニ而差構候筋ニ者無之旨利害申聞候処、申答候者、寺院之可相糺義ニ者候得共、宗意を取乱申候三業方之寺ゝハ、本山ニおゐて何之乱も無之、却而古義を相守候寺方ハ聊之無念等ニ而咎を受、久ゝ京都ニ被差留候時節ニ付、古義方之寺ゝ恐ゝ、何れ之師匠寺ゝへも上京仕相願候寺方無之、宗意一途ニ不相成候而ハ安堵難仕旨申立、強而差押候ハヽ可騒立様子ニ付機別取治候為、無拠御預所領分方之儀ハ、京屋敷留守居共迄添状を以惣代差遣、則本山江去年中ゟ相願候得(と脱カ)も、御尊判御渡無之、旧蠟廿七日ニ至り、先達而ゟ本山ニ被差留、咎を受居候古義方之寺ゝ本山江呼出有之、御門主御出座之上、宗意心得違之族も有之由之境御直命御座候由ニ而、其後右咎を受居候美濃方寺ゝ帰寺有之、右御直命之趣門徒共伝承候処、強而三業方破却之趣ニ無之、仮令破却之御存寄ニ候とも、御口演而已ニ而御尊判不被下候而ハ、安堵難仕旨申立候、右之趣ニ而御直命而已ニ而ハ難取治所江、美濃方為取鎮各御直命持参之役僧可被差向沙汰京屋敷留守居共承之、門徒とも願立候御判物無御渡、右御使僧被差向候而ハ、却而事を招候筋ニも可有之哉ニ存、美濃方之様子承合候迄、先ツ御見合候方可然旨申入置候由申越候、然処当国岐阜御坊所江例年之義之由ニ而、此節御使僧被遣之、同国黒野村御坊江者隔年之御使僧請待ニ付被遣候由ニ而、是又此節各使僧着ニ御座候処、古義方之者之申立候者、右御使僧被遣候節、御尊判被下候様相願置候を持参も無之、其上黒野村御坊江之御使僧者三業方ゟ請待ニ可有之、古義方ニおゐてハ両使僧共廻在之義ハ断候由申之候、右両使僧之儀も御見合候方へも存候趣、京都留守居共ゟ本山江及懸合候由ニ候処、定例之事故被遣候儀者相聞候得共、前文之通古儀方申立候ニ付、廻在否之訳両御坊所江尋遣候処、岐阜御坊ゟ者右之趣意も有之候ハヽ、早速本山江相伺、追而可及返答旨申来り、黒野村御坊ゟ者巡村者暫延引可致旨返答ニ御座候、然処当正月廿三

日之夜、当国席田郡糸貫河原江大勢寄合、何歟及相談候様
子ニ付、近辺御預所村役人可申制ため罷出候処、早速不残
離散仕、何方之者共不承知候得共、宗旨之儀ニも可有之哉、
乍然古儀方之ものニ候哉、三業方之もの共ニ候哉、様子も
不相分旨申出候、右之趣ニ而ハ先者前文之両使僧押而廻在
有之候ハヽ、門徒百姓共如何躰立騒可申も難計、尤村〻取
締者尚又申付置候得共、采女正御預所領分不限事故、何れ
之筋ゟ誘引仕、末〻愚昧之もの共心得違、御国政ニ相拘候
儀出来も可仕哉と支配ニおゐて心配仕候、然共定例之儀ニ
而被差向、御使僧支配之了簡を以者(而脱カ)難差留、殊更為取鎮御
直命之使僧可被遣を差留候儀者不容易義ニ奉存候、如何取
計可然哉御差図被成下候様仕度奉存候、全躰宗意之儀ハ本
山之特別ニ而、役所向ニハ差繕候筋ニ者曽而無之、勿論本
山ニおゐて宗意二途者有之間敷候得共、末寺之内者二途有
之、門徒共之内ニも三業方相守候もの共有之趣ニ御座候間、
本山ニ二途無之ニおゐてハいつれ正意之御判物御渡被遣候
ハヽ、宗意一途ニ可相成処今以無其義、百姓方ニおゐてハ
右一件ニ付、去年中ゟ所〻ニおゐて内寄合又ハ度〻上京仕、
長〻農業相怠り、其上前文糸貫河原江人大勢寄合候程之儀
ニ付、此上いか躰之儀出来可仕も難計奉存候間、取計方之

儀早速御下知被成下度、此段奉伺候、以上

戸田采女正家来

戌二月　井上庄次郎（印）

戌二月十一日

一菅沼下野守江左之心覚之趣懸合候処、即日左之通書付差越候

心覚

一昨九日菅沼下野より懸合有之候西本願寺宗意之儀ニ付、
戸田采女正殿御預所役人ゟ之窺書遂熟覧候処、書面之内ニ
先達而附札を以差図有之趣ニ相見江候、右者旧年自分ゟ及
答候趣被相達候儀与存候得共、為念差図振委細承知いたし
度旨、下野守江及懸合候事

戸田采女正殿

御預り所役人出ス

一濃州村〻百姓方西本願寺宗意之義ニ付申上候書付

書面都而宗之儀者本山之吟味ニ可任筋ニ付、本山糺中百姓共彼是申争ひ候迚、可相分謂無之上者本山糺相済候を可相待旨、百姓共江得与利害被申聞、預り門徒ニ相成度趣等申出候共、是以難相成筋ニ有之、いワんや俗人ニ而宗意之儀を可論訳ニ無之、農業特別之渡世出精可致段得与申宥教諭可致候、且本文ニ使僧之心得同意之門徒共者師匠寺本山ニ　十一
被留置、咎ニ相成候段本山難儀之程ニ相心得与有之候者、門徒与百姓共を本山又者師匠寺江被留、咎申付候事ニ候哉、左候ハヽ僧俗者格別、百姓共を西本願寺ニ而咎等可申付筋ニ無之候間、弥其通ニおゐてハ委細之始末百姓共之方承乱可被申聞候、師匠寺を本山ニ差留置咎等申付候を、門徒之百姓とも憤口被申文言ニ候ハヽ、無子細候得共本文之趣分り兼候、且右之趣者寺社奉行中江懸合之上申達候、以上

酉十二月

二月十二日

築地本願寺輪番

光恩寺

一左之書面差出候

寺社
御奉行所

本願寺築地輪番
光恩寺
教宗寺

濃州辺ニ罷在候当本山末寺之内、宗意心得教示いたし候者共、咎請候もの有之、当時糺中之由ニ而、右末寺とも同意之門徒ともハ、師匠寺之本山ニ而咎ニ相成候を、非分之程ニ相心得候茂有之哉、末寺之内ニ而本山役僧之教示を宗意と心得、門徒之百姓共江申解候も有之、門徒之内ニ而古義

方・信義方与両様ニ相成互ニ誹謗いたし、彼是申合ひ、自然と農業も怠り、品ニより騒き立可申哉も難計不穏成由、右者如何候訳候哉、宗意心得違之者共ニ而も有之、咎等有之哉之趣御尋ニ御座候、則京都江為申登候処、左之趣ニ申来候間申上候

一去ル酉年度中、末寺共宗意安心之義ニ付、互ニ相争ひ申候儀御座候、其子細者当流安心之一途者、開山聖人ゟ代々相承り候他力真実の信心を本と教へ候、其信心之姿と云者、一心一向ゟ弥陀如来今度之我等ハ一大事之後生御たすけ候へとたのみ奉り、此たのむ一念之時ゟたすけり一定往生治定と領解し、其上之念仏者報恩之称名と心得、仏恩之念シ師長父母の恩を重し、王法・国法・守護・地頭法を相守り可申旨教化に及ひ候儀、当流之常教ニ而御座候、然処弥陀をたのむと申ニ付而、身口意三業之儀則を募り、又者弥陀をたのみし年月時日を覚されハ、誠ニ信心ニ非す抔与教るものも有之、又一方ゟハ弥陀願力の不思議を聞得て、疑ひ晴るを信心なりと計申、其上甚敷ニ至てハ弥陀を頼と申事を嫌ひ候様ニ相成、彼三業儀則を調てたのむハ新義なりと、本山学林ニおゐて諸国所化共修学研究之節、相互ニ双方申争ひ候儀も御座候、前顕之通当流安心の一途ニ付、異論無之筋御座候処、悪意楽之もの奸計を以種々申触レ、末々之門徒共為致動顕ニ候哉も難計、既ニ興正寺堂僧并実相庵抔より申勧メ候儀共も有之候、此義者興正寺一件ニ相拘り候儀ニ御座候得共、掛り之面々を以可被仰立儀候間省略仕候、右末学之もの共申争候儀、双方共当流安心之実儀ニ相違仕候事故、双方共被召呼被相糺、去ル十二月廿六日御門主代々相承之宗意正流之趣書付を以被仰聞、猶又師教之不行届訳柄を以、双方師範之もの急度御叱り被仰付、当節右法義争ひ候儀ハ穏ニ相鎮り申候、元ゟ当流之常教一心ニ弥陀を頼み、安心決定之者王法・国法を相守り候義ゟ御座候者、争論ヶ間敷事ハ無之御義ニ候

一右躰之儀ニ付、美濃国末寺共之内ニおゐても、両三ヶ寺宗意之教示異途之儀を申拒ミ、又ハ志之由申金子取集候趣相聞候付、本山江召呼差留置候処、非分之様ニ相心得候も有之候由、此儀其各寺之相争ひ候事故、各其師匠寺之非分を不外聞ニ存候より、其門徒共心得違候而、右躰申成し候儀与被存候、然処旧蠟廿七日御門主廿六日之通之御直裁御座候而相済候得者、無程帰国可仕儀ニ御座候

一末寺共之内ニ而本山役僧之教示を宗意与心得、門徒之百姓共江申解候も御座候由、此儀本山役僧之教示を正流ニ請候

ハヽ、宗意安心之趣を如実ニ相心得候ものニ而、左候ハヽ
彼是争ひ候儀ハ有之間敷筋ニ御座候
一門徒之内ニ而古義方・新義方両様相成、互ニ誹謗いたし彼
是申上候、自然与農業怠り、騒き立可申哉難計由、此義本
山ニおゐて祖師以来代〻御門主相承被在候宗意ハ、前顕申
上候通一途之安心ニ御座候得者、古義・新義与申儀者曽而
無御座、正統之安心之趣を相心得候ハヽ、互ニ誹謗いたし
候儀も無御座、勿論守護・地頭法を相守り、限ある年貢・
所当具ニ沙汰いたし候様、宗門之常教ニ候得者、法義ニ付
門徒之百姓とも農業怠り候儀者有之間敷儀ニ而、言語道断
之儀ニ御座候、右之段者宗意安心之趣心得違ゟ事起り候儀
と被存候、其侭被差置候而ハ、又〻末〻ニ至り百姓共抔相
争ひ候事出来候得者、公辺御苦労之程被恐入候儀ニ候得者、
本山ゟも精〻入念教化ニ被及候儀ニ候、元ゟ前顕申上候通
一心一向ニ弥陀を頼み、後生之一大事落付候上者、王法・
国法を相守り候事、当流之常教ニ而、此外ニ別ニ教へ方ハ
無御座候、右御尋ニ付御返答申上候、以上

本願寺築地輪番
光恩寺
教宗寺

戌二月

本願寺築地輪番
光恩寺
教宗寺

口上覚

別紙一通入御覧候、右者御門主一宗之僧俗門末ニ直ニ裁判
被申渡候事を、宗門ニおゐて御直裁と相唱候、此御直〻之
裁判ニ而諸国僧俗者不及申、門末とも一統ニ帰服仕候儀ニ
候、別紙之中廿六日御門主代〻相承宗意正統之趣、書付を
以被仰聞候と申書付者、唯今申上候御直裁之事ニ御座候、
以上

二月

本願寺築地輪番
教宗寺
光恩寺

寺社
御奉行所

濃州三ヶ寺
黒野

教徳寺
大垣
円覚寺
木田村
仏心寺



チ御代々御相承ノ一途ニシテ、近クハ信慧院殿・信入院殿御懇ロニ御教導マシマス処ナリ、コレヲスナハチ本願ヲ信受スルトモ、名号ヲ聞信ストモ云ヘシ、近来心得違ヒノ輩ラコノ一念ニツイテ三業ノ儀則ヲ穿鑿シ、或ハタノミシ年月日時等ヲオホヘサレハ、信心ニアラスナト沙汰スルヲモテ、却テ御正化ニモトツカサルタクヒコレアルヨシ、大ニ歎キ思召サル、処ナリ、シカレハ御一宗ノ道俗相互ヒニ我執ヲヤメ、心底ヨリ御相承ノ一念ヲマモリ、四海一味ノ安心ニ住シテ、ウツクシク法義相続アルヘキコト肝要ノ旨仰セ出サレ候ナリ

酉
十二月

二月十三日

一菅沼下野守江去ル九日請取候書面、今日答下ヶ札いたし、評定所持出し相達之

但右答下ヶ札者九日之処ニ記有之

戸田采女正殿家来

井上庄次郎

一依召参上

十二

御直裁写

高祖聖人御相伝一流ノ肝要ハ、タ、他力真実ノ信心ヲモテ本トシ玉フ、ソノ信心ノスカタトイフハ、御文章改悔文ノ通リ諸ノ雑行雑修自力ノ心ヲフリステ、一心一向ニ阿弥陀如来今度ノ我等カ一大事ノ後生御助ケ候ヘトタノミ奉ルハカリナリ、コノタノム一念ニ御助ケ一定往生治定ト存シ、コノ上ノ称名念仏ハ御恩報謝トコ、ロウヘシ、コレスナハ

旧蠟問合有之候書面江答下ヶ札いたし、以役人相達候
但答下ヶ札旧蠟廿日之処記之
別段役人より左之通口達

旧蠟御問合之書面江御答被申達候ニ付、当月御差出之書面ハ別段ニ御答不申達候、且宗意之義於本山二様ニ相成候儀無之処、近来宗意心得違ひとの有之候付、夫ゝ本山江被召呼糺之上教誡も有之、宗意正統之示教委細書付を以直裁有之由相聞候事

十三

西本願寺輪番
光恩寺

一依召参上
左之書付相達之

濃州村ゝ寺院之内、教化方心得違之儀有之門徒之百姓共、古義・新義与引分り及争論、品ニ∫騒立可申様子ニ相聞候、畢竟右者寺院之教化方心得違∫事起り候義与相見、不穏義ニ而宗意心得違之寺院ニ者、当時本山ニ而糺中之趣、領主∫申立有之、右心得違之寺院早ゝ糺之上夫ゝ申付有之、且本山江願筋有之由ニ付、上京いたし罷在候門徒之百姓共も、

十四

夫ゝ教誡之上宗意之趣会得為致候ハヽ、早速帰村もいたし、穏ニ相成可申筋ニ相聞候間、宗意心得違之寺院并上京いたし罷在候門徒之百姓共をも、早ゝ教誡有之候様本山江可申遣事

別段口上ニ而、左之通以役人相達之

美濃国門徒共之内ニ而、於本山古義を相守候寺院者、久ゝ京都ニ差留被置、三業方之寺ゝハ何之糺茂無之、且美濃国江被差向使僧茂、三業方∫之請待ニ而被差向候哉ニ門徒共申居候由ニ相聞候間、猶勘弁可有之事

二月廿二日

本願寺築地輪番
光恩寺

一左之書面差出

本山宗意之儀ニ付、先達而御尋御座候趣、早速京都江為申登候処、始末之様子申来候ニ付、其趣を以此間御返答奉申上候、然処此度御達之次第不軽義ニ奉存候間、何卒七里内膳・寒松寺・実相寺三人共懸り違候義ニ者候得共、此節本山表重役之もの人少ニ有之候上、病気ニ罷在候もの茂御座候得者、取計不行届義も可有之哉与無心元奉存候ニ付、右

三人共上京仕度之旨別紙を以御願申上候間、願之通被仰付
被下置候様仕度、此段之御沙汰可申下候、以上

本願寺築地輪番
二月廿二日　教宗寺
光恩寺

寺社
御奉行所

但争論一件之ものより之願者西・興一件帳之方ニ記
之

二月廿五日

一争論一件ニ而罷出候面々帰京之義願之通申達之
右承届候迄夫々手続有之候得共、西・興一件之方ニ
記之

十五

戌七月廿日

一石川左近将監より左之達書於御城受取、同廿二日答下ヶ札
以手紙相達

脇坂淡路守殿　石川左近将監

濃州戸田采女正殿御預所村々之内、西本願寺宗意之儀ニ付、
先達而菅沼下野守勤頭中及御懸合候一件、猶又此度御同人
御預所役人ゟ別帳之通申立相伺候、最初御懸合之趣与者、
本願寺取計有之義致齟齬候趣も有之哉ニ相聞申候、此節之
振合ニ而ハ兎角不穏趣ニ而、御領所取押方ニも差支候趣口
上ニ而も精々申聞候間、猶又候懸合仕候、可然様被仰達御
座候様仕度候、以上

七月廿日

脇坂淡路守

御書面之趣令承知、別紙采女正殿御預所役人差出候伺
書一覧いたし候処、西本願寺取計方之義、先達而拙者
方ゟ相達候趣与ハ相違之取計も相見候間、輪番共江相
尋、猶又取治方之儀早々本山江可申遣旨、委細相達候
様可致候間、百姓共騒立不申様利害可申聞置候旨、御
領所役人江可差図有之候様存候

七月　脇坂淡路守

濃州村〻之内西本願寺宗意之儀門徒
百姓惑乱ニ付伺書

戸田采女正
御預所

濃州村〻之内西本願寺宗意古義・信義迄一途ニ相成、門徒及惑乱候ニ付、摂州右躰宗旨差採候節、同国出候通之御尊判并御門主御直覧書物被下候様、美濃方古義門徒ゟ本山江願中、右願与相違之書物持参之使僧美濃方江被差向、門徒百姓共騒〻敷御座候処、戸田采女正御預所之儀者同宗多分有之候ニ付、右之趣当戌二月奉伺候処、右教化方之儀者当時本山吟味中之事故、同所ニおゐて早〻相糺、心得違之末寺共者夫〻申付有之、本山江願出候百姓共も利害申聞、帰村為致候ハヽ、相治り可申筋ニ付、其段寺社御奉行様ゟ西本願寺輪番江委細被仰渡御届候間、御預所ニ而も右之趣相心得、百姓共江利害為申聞、尤此節本山より使僧等被差向候而者却而騒敷可相成様子ニ候ハヽ、其訳本山役人江及懸合、使僧廻村之儀相断候而も不苦労被仰渡候ニ付、門徒百姓共江利害申渡候処承知仕、乍然本山江者先達而之願筋申立呉候様相願候ニ付、本山御役人江右之趣とも懸合およひ置候処、其後門徒共願出候者筋違之由ニ而、願書惣代江差戻ニ相成、尤も願通ニ裁断書并御門主教化書を以使僧可被差向間、其節者地頭ゟ取締役人等附添呉候様、采女正京都屋敷留守居之者江達有之、則使僧心鏡寺二月十五日京都出立ニ相決、門徒共相歓待兼候処及延引、四月中旬ニ至り使僧寒松寺大垣城下江参着、役人共江申聞候者、此度被差向候趣意ハ末寺門徒共ゟ如何躰之儀を申出候哉、大垣役所ニおゐて聞込之次第御門主被成御聴候上ニ而、又〻使僧被差向門末御教化之御存寄候間、門末及愁訴候始末無服臓為申聞呉候様申聞候付、役所江訴出候趣とも申達候処、門徒惑乱之由門末より差出候書付、内〻為見呉候様寒松寺申聞候得共、

宗意之儀者支配ニ而不取扱儀ニ付、相糺候書類ニ而者無之差出候付、心得ニ見置候品ニ付及断候処、達而相頼候故任其意為見、孰れに茂急ゝ門徒共相治り候様いたし度旨申述候処、寒松寺相答候ハ、猶又五月十日頃迄ニ者罷越、門末安心向相糺請書等申付可取鎮旨、其上門徒願通御尊判等持参可申旨、門徒惣代共江も申聞罷帰、先相治り居候処寒松寺下向も延引、其上於本山糺可有之旨ニ而、末寺拾弐ヶ寺召登セニ相成候処、門徒百姓共大勢附添可罷登旨相聞候ニ付、農業専之時節殊大勢罷登候儀不埒之旨申渡差留候処、惣代并重立候ものハ合点も仕候得共、愚昧之者共得心不致処、於本山糺之儀者事を相招候道理付、先達而使僧寒松寺引合通り於美濃方糺無之而者相治間敷旨、本山御役人江及懸合候処、末寺共寺法尋之儀ニ付、俗門徒江拘り候儀無之候間上京差留、是非共附添之儀相願候はゝ、一ヶ寺ニ一両人宛罷登り候儀者乍不用不苦、末寺上京之儀取扱呉候様相頼来申候、然処門徒惣代共申立候者、寺ゝ計り本山江難差出訳者、本願寺宗派之儀者後世之一大事、門末共一味之安心ニ無之而ハ不相成儀ニ候処、其安心方糺之儀ニ候得者、俗門徒も一同聴聞会得不仕候而者不相成、然処本山表役僧始役人中多分新義方、并此度江戸懸所先ゟ為取鎮上京之役僧之内ニ茂新義有之、殊此度於講堂新義三業之邪義益申募リ候趣ニ相聞、然者三業方之者共謀計を以古義之寺ゝ呼寄、差押可申者眼前、其上末寺之義ゟ付及異儀候得者、本山権威を以いか躰之罪ニ取計可有之も難計、既ニ去年中古義之寺ゝ長ゝ咎等申付非分之取計有之候、右之趣ニ付新義奸計之糺者難受候間、宗意安心別ニ途糺之儀者東本願寺・興照（ママ）寺者元来一宗之内ニ候得者、祖師相伝之宗意者同様ニ御座候間、右役僧等立合糺ニ無御座候而者、正義之場江不行届古義方得心難仕、何卒此上者御公儀之御慈悲を以一宗之寺ゝより立合糺被仰付被下度、尤古義門徒願之儀者摂州江被下候通之御高判之儀ニ御座候処、芸州・筑州江も右同様御高判出候由ニ候得者、美濃方江被差向候迚本山差支之筋有之間敷、未来之儀者出息入息を不待与常ニ教化有之一大事与相心得罷在候処、美濃方門徒惑乱者無差構段一同深憤り罷在、尤惣代并重立候ものハ役所ゟ之利害承知仕候得共、小前愚昧之ものハ表向者聞請、内心者未来之一大事本山ゟ無厭取計ニ付、いか躰之儀を仕候茂難計、殊ニ村ゝ大勢之儀ニ付、差押候儀中ゝ村役人并惣代等之力ニ難及旨届出、農業も等閑ニ相成候趣ニ相聞候ニ付、本山ゟ頼之趣及利害候得共難取治相見へ、若及強動候得者御政務ニ相拘リ不容

易儀ニ付、末寺呼登セ之儀暫延引有之様本山役人江懸合仕
置申候、尤門徒共申立候通一宗之内東本願寺・興照(ママ)寺立会
糺等之儀本山江難有合筋ニ付、猶門徒共江利害も可申聞候
得共、前文之通愚昧之もの共後世之一大事之儀与一図ニ存
詰差はまり候儀ニ付、心得違いか躰之騒敷儀出来可仕も難
計、尤若及騒動候儀出来之節、取鎮方手当申付置候儀ハ勿
論御座候、右宗意惑乱ニ付近来ハ自然与農業茂怠り、御政　十七
務并御取箇ニ茂差閊候儀ニ付、右一件取計之儀迷惑仕候間、
御下知被成下候様仕度、此段奉伺候、以上

戸田采女正家来
　享和二戌年七月　　林藤兵衛　印

戸田采女正家来
林藤兵衛

戸田采女正家来
一左之書面壱通差出之　　林藤兵衛
役人請取置之

戌七月廿二日答下ヶ札相達ス

濃州村ゝ之内西本願寺宗意古義・新義与二途ニ相成、門徒
及惑乱候ニ付、摂州ニ而右躰宗意差揉候節、同国江出候通
之御高判并御門主御直説書物被下候様、美濃方古義方門徒
与本山江願中、右願与相違之書物持参之使僧美濃方江被差
向、門徒百姓共騒ゝ敷御座候処、戸田采女正領分之儀ハ同
宗多分有之候付、右之趣当戌二月奉伺候之処、右教化方之
儀ハ当時本山吟味中之事故、於同所早ゝ相糺、心得違之末
寺共者夫ゝ申付有之、本山御願出候百姓共も利害申聞、帰
村為致候ハヽ相治り可申筋ニ付、其段寺社御奉行様与西本
願寺輪番江委細被仰渡御座候間、領分ニ而茂右之趣相心得、
百姓共江利害為申聞、尤此節本山与使僧等被差向候而者、
還而騒敷可相成様子ニ候ハヽ、其訳本山役人江及懸合、使
僧廻村之儀相断候而茂不苦旨被仰渡候付、門徒百姓共も利

害申渡候処承知仕、乍然本山江者先達而之願筋申立呉候様相願ニ付、本山御役人江右之趣共及懸合置候処、其後門徒共願出候者筋違之由ニ而、願書惣代而差戻しニ相成、尤願通之裁判書并御門主教化書を以使僧可被差向間、其節ハ地頭ゟ取締役人等附添呉候様、采女正京都屋敷留守居之もの江達し有之、則使僧心鏡寺二月十五日京都出立ニ相聞、門徒共相歓待兼候処、及延引、四月中旬ニ至り使僧寒松寺大垣城下江参着、役人共江申聞候ハ、此度被差向御趣意者、末寺門徒共ゟ如何躰之儀を申出候哉、大垣於役所聞込之次第、御門主御聴被成候上ニ而、又ゝ使僧被差向門末御教諭之御存寄ニ候間、門末及愁訴候始末無腹臓為申聞呉候様申聞候付、役所訴出候趣申達候処、門徒惑乱之由門末ゟ差出候書付内ゝ為見呉候様寒松寺申聞候得共、宗意之儀者支配ニ而不取扱儀ニ付、相糺候書類ニ而者無之差出候ニ付、心得ニ見置候品ニ付及断候処、達而相頼候故任其意見セ、孰れニ茂急ニ門徒共相治り候様いたし度旨申述候処、寒松寺相答候者、猶又五月十日頃ニ者罷越、門末安心向相糺請書不申付可取鎮旨、其上門徒願通御裁判等持参可申旨者、門徒惣代共江茂申聞罷帰、先相治居候処寒松寺下向茂延引、其上於本山糺可在之旨ニ而、末寺十二三ヶ寺召登セ相成候処、門徒百姓共大勢附添可罷登旨相聞候ニ付、農業守之時節殊大勢罷登候儀不埒之旨申渡差留候処、惣代并重立候もの者合点も仕候得共、愚昧之者共者得心不致処、於本山糺之義者事を相招候道理ニ付、先達而使僧寒松寺引合通、於美濃方糺無之而者相治間敷旨、本山御役人江及懸合候処、末寺とも寺法尋之儀ニ付、俗門徒江拘候儀無之候間上京差留、是非とも附添之儀相願候者一ヶ寺ニ壱両人宛罷登候儀者乍不用不苦、末寺上京之儀者取扱呉候様相頼来申候、然処門徒惣代とも申立候者、寺ゝ計り本山江難差出訳者、本願寺宗派之儀者後世之一大事、門末共一味之安心ニ無之而者不相成儀ニ候処、其安心方糺之儀ニ候得者、俗門徒も一同聴聞会得不仕候而者不相成、然処本山表役僧始役人中多分新義方ニ而、此度江戸懸所先より為取鎮、上京之役僧之内ニ茂新義有之、殊此節於講堂新義三業之邪義益申募り候趣ニ相聞へ、然者三業方之もの共以謀計古義之寺ゝ呼寄差押可申者眼前、其上末寺之儀ニ付及異儀候得者、本山之権威を以いか躰之罪ニ取計可有之茂難計、既ニ去年中古義之寺ゝ長之咎等申付、非分之取計有之候、右之趣ニ付新義奸計之糺も難請候間、宗意安心前二途糺之儀者東本願寺・興照（ママ）寺者元来一宗之内ニ候得者、祖師相伝之宗意同様ニ御座

候間、右役僧等立会糺無御急候而者正儀之場江不行届、古義方得心難仕、何卒此上者御公儀之御慈悲を以一宗之寺々より立会糺被仰付被下度、尤古義門徒願之儀ハ摂州江被下候通之御高判之儀御座候処、芸州・筑州江茂右同様御高判出候由ニ候得者、美濃方江被差向候迚本山差支之筋有之間敷、未来之儀咎茂不相待旨常々教化有之、一大事与相心得罷在候処、美濃方門徒惑乱者差構無之様一同深憤り罷在、惣代并重立候者役所より之利害承知仕候得共、小前愚昧之もの者表向聞請候得共、内心者未来之一大事本山ゟ無厭取計ニ付、いか躰之儀を仕候茂難計、殊ニ村々大勢之儀ニ付、差押候儀中々村役人并惣代共之力ニ難及旨届出、農業も自然与等閑ニ相成候趣ニ相聞へ候付、本山より頼之趣及利害候共難取治相見、若及騒動候得者政務ニ茂相拘り不容易儀ニ付、末寺呼候登之儀暫延引有之様、本山御役人懸合仕置申候、尤門徒共申立候通一宗之内東本願寺・興照(ママ)寺立合糺等之儀者本山江難懸合筋ニ付、於門徒共江利害も可申聞候得共、前件之通愚昧之者共後世之一大事之儀与一図ニ存詰、差はまり候儀ニ付、心得違いか躰之騒敷儀出来可仕茂難計、尤若及騒動候儀出来之節、取鎮方手当等者兼而申付置候、右宗意惑乱ニ付近来者自然与農業も怠り、政務ニ茂相拘り候段在所役人共ゟ申越候ニ付、右取計方之儀御問合申上度奉存候、以上

戸田采女正家来
戌七月　林藤兵衛

書面西本願寺末寺并旦家共宗意心得違之ものハ、夫々教示いたし取治候様、先達而本山江可申遣旨本願寺輪番江達置候処、書面之趣ニ而ハ、拙者方ゟ相達置候趣与ハ相違之取計茂有之哉ニ相見候間、輪番江も尋候上、猶又取治方之儀早々本山江可申遣旨可相達候間、百姓并騒立不申様得与利害被申聞置候方被存候

七月

戌七月廿二日

築地本願寺輪番
光恩寺

一依召参上

昨廿日采女正殿家来差出候問合書面之儀ニ付、星野鉄三郎ゟ宗意取治方之儀相達候、右相添左之書取以役人相渡之

濃州表法儀筋之儀ニ付両度達之趣夫々江申聞、濃州表江御使僧被差向教諭いたし、本山江願出候門徒も利害申聞、会

得いたし罷帰相治り候儀ニ可有之処、今般濃州領主ゟ申立之趣者、本山江門徒共願出候者筋違之由ニ而、願書惣代江差戻ニ相成、尤願通之裁許書并御門主教化書をひ（ママ）、使僧可被差向旨領主江本山ゟ達有之、二月十五日御使僧京都出立ニ相決、門徒共相歓待兼候処及延引、四月中ニ至り御使僧寒松寺儀大垣城下江参着之上、領主役人江応対いたし、末寺并門徒共より如何之儀を申立候哉之趣、御門主御聴被成候上ニ而、又〻使僧被差向門末御教諭之御存寄ニ候間、内〻承度趣ニ付、夫〻領主役所江願出候書付為見、急〻門徒共相治候様いたし度旨領主役人申述候処、寒松寺相答候者猶又五月十日頃ニ者罷越、門末安心向相糺請書等申付可取鎮旨、其上門徒願通御尊判等持参可申旨門徒惣代共江も申聞罷帰、先ツ相治居候処寒松寺下向も延引、其上於本山糺可有之旨ニ而、末寺拾二三ヶ寺召登セニ相成候処、門徒百姓共大勢附添可罷登旨相聞候ニ付、領主ゟ差留有之、惣代并重立候もの共ハ合点もいたし候得共、愚昧之もの共得心不致候付、寒松寺引合通於美濃方糺無之候而者相治間敷旨、本山役人江領主役人ゟ懸合有之候処、末寺共寺法尋之義ゟ付、俗門徒江拘り候儀無之候間、門徒共上京差留之儀本山役人より懸合有之候処、門徒惣代も申立候者、寺〻計本山江難差出訳者、本願寺宗派之儀者後世之一大事、門末共一味之安心候無之候而ハ不相成儀ニ候処、其安心方糺之儀ニ候得者、門徒共一同聴聞会得不致候而者不相成候、然処本山表役僧始役人中多分新義方ニ而、此度江戸懸所先ゟ為取鎮上京之役僧之内に茂新義有之、殊ニ此節於講堂新義三業之儀申募候趣ニ相聞、然ル上者三業方之もの共謀計を以古義之寺〻を呼寄、差押可申者眼前、其上末寺之儀ゟ付及異儀候得者、本山権威を以いか躰之罪ニ取計可有之茂難計、既ニ去年中古義之寺〻長く咎等申付、非分之取計有之、右之趣ニ付新義奸計之糺者難請抔申立、尤古義門徒願之儀者摂刕者出候通之御高判之儀ニ候処、芸刕・筑州江茂右同様御高判出候由ニ候得共、美濃方江被差向候迚本山差支之筋有之間敷、未来之儀者常〻教化有之一大事与相心得罷在候処、美濃方門徒惑乱者無差構段一同深憤り罷在、尤惣代并重立候ものハ領主ゟ之利害も承知いたし候得共、小前之もの共者兎角聞請不申、未来之一大事本山ゟ無厭取計ニ付、いか躰之儀仕出し可申茂難計、精〻利害者領主ゟ申聞候得共得心可致様子ニも相見不申、品ニ寄及強動可申様子有之候由、右之通ニ而者先達而相達候趣者聊不相用、惣代之ものとも江も利害等茂不申聞、筋違之願之由ニ而、願書被差

戻候段如何之儀ニ候哉、右躰門徒共及惑乱候ハヽ早速御高判状等被相渡、使僧等被差向教諭之上速ニ取鎮可被申処、寒松寺罷帰候後、使僧も不被差出候而者弥門徒之もの共疑惑いたし可申筈之処、何故早速取鎮之教諭茂無之長引候哉、甚不審之次第ニ候、門徒之もの共江教諭之上早速相治候様、夫〻取計有之様本山江可申遣事

戌十月十七日

築地本願寺輪番

光恩寺

教宗寺

一左之書面差出

十九

濃州法義筋一件先達而御尋ニ付、早速京都江申遣候処御返答延引仕候訳合申来候ニ付、左ニ申上候

一去酉年夏以来濃州表ニ而門末騒立候様子、本山江者一向不相聞候処、十八ヶ寺連印ヲ以別紙イ印之通願出候、尤大垣縁覚寺等心得違之儀茂有之ゟ付、本山ニ差留置候処、俗門徒共ゟ本山江右差留候もの帰国之義願出候得共、多人数上京之様子ニも無御座候、尤摂州十三日講内より法義筋之儀ニ付願出候趣も有之、去酉二月御裁判被仰渡候、右御裁判書濃州表江御差下し御座候様相願候得共、右御裁判書ニ付末〻ニおゐて如何相心得候哉、当流御相承安心之一途改転候様御申触候ニ付、初夏之頃ゟ京都近国人気騒〻敷相成、且学林ニおゐてハ阿弥西念寺慮隠副講之儀ニ付、彼是騒立僧俗雷同いたし候ニ付、一宗御相承安心之一途、去酉六月朔日御門主御直命御座候而一同相治り候、右躰之始末ニ御座候得者、濃州表願ニ任セ右十三日講御裁判書差下し候ハヽ、又〻心得違之族出来可申哉ゟ付難差下、然候(ルか)処戸田采女正様京御屋敷御留守居喜多村権右衛門より、右裁判書是非差下候之様懸ケ合有之候得者、容易難取計種〻及懸合候、いつれ人気不相治候ハ而者不相済儀故、去酉極月御直命御書下ケ有之、右ニ而一同相治り、右十三日講御判断書濃州表願之儀も相止ニ可申筋ニ御座候処、然処旧冬御奉行所より濃州辺之儀御尋、猶当春取治之儀等被仰渡候ニ付、

御門主御敬承被為在候処、采女正様京御留守居ゟ心鏡寺使僧として、摂刕十三日講判断書不差下候ハ而者難相治旨申来候処、在府三人之面〻上京ニ付始末申談候処、御奉行所ゟ被仰渡不軽儀、且御判断書差下し、若心得違之者出来候時ハ願方ハ相治可申候得共、又〻一方之門末騒立候様相成可申哉、何分御沙汰之趣恐入御事故、戸田采女正様御役所江門末共より如何躰之申出候哉、右願出候主意を以相糺し候迄取治メ之使僧被差向度ニ付、寒松寺為味噌（使僧カ）大垣表江被差向、夫〻御役方江被問合申候処、寺社役方より書物二冊被相渡候処、右之内粗相違之儀も有之候ニ付、一応相尋相違之儀利害申聞、其上ニ而御役方江遂一申解有之候様致度ニ付、右書物差出候ものゝ内一両寺召登度、御役方江寒松寺ゟ紙面を以及懸合候処、右二冊之儀者内〻差出候書物故、末寺共差登候儀難相成旨返書到来申候、猶又郡役方ゟ来候法中異論証拠物与申書物、喜多村権右衛門より被差越候ニ付、右異論之末寺共是又双方召登相糺候上使僧被差向度、尤双方御料・私領入組寺〻数多之事故、采女正様御領内并御預り所之内ニ而者右しらへ片付不申、依之多人数召登候而ハ騒〻敷相成可申哉恐入、先ツ双方十一ヶ寺召呼候処、相手方早速上京いたし候得共、願方之寺〻ハ門徒とも先留候趣ニ而上京不仕旨、別紙口印之通大垣御役方より京御留守居を以被御申越有之、就右門徒共之儀者御領法を以御取鎮被下、末寺之儀ハ本山江御差登被下候様、別紙ハ印之通御頼申入候処、七月十一日頃喜多村権右衛門御門（ママ）本山江被罷出、江戸表江相伺候上御返答可有之旨御申越ニ付、致承知相待罷在候処、頭立候門徒共上京之儀納得いたし候趣ニ付、寺内村光沢寺・牛飼村妙教坊右両寺七月十六日致発足候処、途中青野原ニ而数百人罷出上京差留候由、岐阜懸所并大垣縁覚寺ゟ本山江注進申登セ駕入候、元来当春糸貫河原江も数百人相集候由、右躰多人数相集り騒動いたし候事何故之主意とも不相聞、甚不審致儀御座候、勿論両寺上京差留として青野ヶ原江数百人相集り候段、両寺多分之門徒を領し候寺柄ニも無之候得者、悪意之者奸計ゟ事起り候儀哉与歎ヶ敷次第御座候、右被仰渡候趣敬承仕精〻取治メ仕り、三人之者出府之上委曲可申上段申来候、以上

本願寺築地輪番

九月　　光恩寺

教宗寺

イ印

二十

乍恐奉願上候

一近来御法義別而厚ク被為在御引立、信慧院様・信入院様御代数章之御書御染筆被成下、御門末之我〻難有奉信順候、然ルニ間〻不得心之旨有之、於諸国御安心違途ニ走り候ニ付、当春大善智識様深重之思召を以御高判被仰出、御相承之一途弥〻難有奉存候、然ル処右之御教示今以不奉信順候哉、三業帰命之儀則等を以安心之談し、御正教御弘通之障导をかし候旨茂有之、其甚敷者今般之御高判ニ疑慮を懐き候者茂相聞、大善智識様之思召茂徒に成行候哉と、甚恐入歎ヶ敷奉存候、且当夏於学林ニ河州西念寺殿副講之儀ニ付、所化之内ゟ故障被申立候由承及ひ候、右西念寺儀者御文章改悔文之如く実ニ讃歎被致候様兼而承り候、然ルニ不正之様ニ申なされ候段、甚以不審奉存候、此趣ニ而者畢竟諸国之僧俗不和合之端与相成、御本山御苦労不被為在止事、右御高判之思召茂自然与隠没仕候哉と、乍恐無申計歎ヶ敷儀ニ奉存候、因之右不心得之旨御糺被下置、四海一味御正義尓随順し、一統御法義之上より御本山御崇敬申上候様相成候ハヽ、無此上茂難有可奉存候、右之趣乍恐厚御勘考被成下、早速ニ御吟味之上御下知被為仰付被下置候様ニ偏ニ奉願上候、以上

享和元年　　美濃国法中惣代

酉五月

縁覚寺　　霊潭　判

光照寺　　祐遠　判

余浄寺　　順恵　判

善徳寺　　秀道　判

長光寺　　探龍　判

性顕寺　　了快　判

光福寺　　慈遊　判

教念寺　　大智　判

「西本願寺宗意惑乱一件」文書を読み解く（第一年次）研究報告

蓮教寺
謙譲　判
浄明寺
教雪　判
祐国寺
香雲　判
長久寺
了便　判
大性寺
智周　判
起晢寺
早頻　判
長福寺
義導　判
大蔵寺
智花　判
円成寺
栄叶　判
正円寺
恵広　判

廿二（二）

御本山
御役人衆中様

ロ印

六月廿六日

戸田采女正殿御留守居
喜多村権右衛門来
大学面会

口上

別紙之趣在所表ゟ申越候、則本紙為御一覧差上置候、
右返答明廿七日七時迄ニ否被仰聞度、即刻飛脚差戻可
申旨、尤其節本紙御返却可被下旨申置

此度西本願寺末寺之内被呼登候由、寺〻ゟ上京之願追〻差
出候処、右ニ付門徒惣代共ゟ追〻相願候者、右法中為呼登
相成候者、定而宗意糺之儀候而も可有御座哉之旨ニ而、先

頃ゟ種〻願出候得共、先達而江戸表江相伺候節、御附紙之趣も御座候間、本山糺を不相待彼是申立候ハ筋違ニ茂御座候故、度〻利害申渡願書差戻候処、猶又今度申出候者、是迄本山御懸合度〻相違之趣、且又去冬以来上京之寺〻御取扱之様子其外種〻申立、是非ニ上京難為致差留申候旨心得違之儀ニ候得共、惣代共利害茂不相用、此上強而御呼登相成候ハヽ、門徒共附添可罷登心得之由申募候之旨、此段者先達而差留置候儀者御座候処、旁以右躰不法之儀申募候而者、国法も難立御座候間、右之始末江戸表江相伺候心得ニ而御座候、乍然本山江御懸合中之儀ニ付一応得御意候間、本山御役人中江一通り被成御通達、聢与承知之趣被成聞、早〻御報可被仰聞候、尤右一件戸田淡路守様・同寛之丞様御分知之百姓共之内ニも同様申立候ニ付、当御預所并御領分方執計ニ准度旨、右役人中ゟ申聞候間、此段も御演説可被成候、以上

六月廿二日

ハ印

六月廿七日喜多村権右衛門まて返答手扣之写

口達扣

昨廿六日御国元ゟ御到来之御別紙御持参、則懸り之者江為致披見候処、此度其御表当本山末寺共之内、寺法筋尋之儀ニ付為呼登候処、右寺ゟ上京之儀願御届申出候由、依之門徒惣代共ゟ追〻相願候者、右法中為呼登候義ハ宗意糺之義ニ而も可有之哉之旨ニ而、先頃ゟ種〻願出候得共、先達而江戸表江御伺之節、御紙帋之趣も御座候由ニ付、本山糺を不相待彼是申置候者筋違ひ尓も御座候故、度〻御利害御申渡之上願書御差戻し之処、猶又此度申出候趣も有之、旁此上強而為呼登候ハヽ、門徒とも附添可罷登心得之由申募り候旨、乍然此段者先達而御差留被成置候処、旁以右躰不法之儀申募候而者御国法難被為立候付、右之始末江戸表江御伺可被成御心得之旨候得共、当本山江御懸合中之儀ニ付、一応貴所ゟ御通達之上否及御答候ハヽ、早〻御国元御達可被成旨、尤右一件戸田淡路守様・同寛之丞様御分知之百姓共之内ニも同様申立候ニ付、其御預所并御領分御取計ニ被准度旨、右役人中ゟ被申聞候段委曲致承知候、然処右為呼登候末寺共之儀ハ、寺法筋尓付相尋候儀ニ而、俗門徒共ハ

相拘り候儀ニ而者曽而無之候、尤於御国元無御如才被仰聞候上之儀ニ御座候得共、何卒今一応乍御面倒右俗門徒とも上京之儀者、御領法以御威光御差留メ、此上御利害被仰聞候而、右法中計り致上京候様御取計之儀呉ゝ御頼申候、万一是非門徒附添上京いたし度相願候ハヽ、壱ヶ寺ニ壱両人程之元罷登候儀者不用なから不苦存候、尤右法中上京之儀御取扱御座候候(行カ)ハヽ、当本山ニ而尋之趣相済次第早速帰国可申付候間、何分此趣御含被下度御頼得御意候、此段御国許江宜御通達可被下候事

十一月九日

戸田采女正家来

林藤兵衛

一左之書付帳面壱冊差出之

戸田采女正家来

林藤兵衛

先達而追ゝ申上候西本願寺宗意惑乱之一件為糺、今般従本山御使僧西光寺被差向候処、右西光寺役人共江面会申聞候者、采女正御預所領分并分知、此三分之法中を相糺候由、然処右三分ニ有之候寺ゝ之門徒御他領ニも有之候、又御他領之寺方門徒者三分ニ茂御座候而、入跨候門末之惑乱ニ付御他領一同申立候処、右三分計被糺候由、左候而者可相治筋共不相見候得共、右之段彼是及懸合候内、段ゝ延引仕候故、先ツ糺被取懸候様相達置候処、三分之法中より別帳之通御使僧江及懸合、返答承候上糺請度旨付而者、差続門徒共儀も右同様之趣意、其外本山江宗意二途有之旨及承候事共種ゝ申立、御使僧江懸合仕度種ゝ是又否之返答承候上糺請度旨、右門徒ともゟも申出候、右者去年以来本山之取計方手間取候故、愚昧之者共段ゝ申募り候事ニ者候得共、俗人ゟ申立候者、如何敷筋も有之哉ニ相聞へ、并本山之糺を請間敷との儀ニ者無之、右之答糺以前ニ承度との儀ニ御座候得共、中ゝ御使僧即答可有御座儀共不相聞候、彼是延引仕候而者本山之糺を請兼候筋ニも近寄候哉ニ付、色ゝ利害申聞候処、兼ゝ申上候通至而差はまり、強殊更門徒共ゟ申出候者、何レ之村方ニ茂新古入交り居候ニ付、互ニ宗意安心向是非を争ひ候内ニ、我意を申募、気肌相離、内心ニ憤りを含、村内者勿論親類・縁者等迄も不睦候様相成、夫婦

離別等出来仕、彼是人気穏不成候、右之振合ニ而意恨相重り、追日惑乱増長仕、自然与諸向江差閊難相治難渋ニ相迫り候段申立、此度美濃方糺之儀者手始ニ而不行届時者、諸国同志之者迄茂差障ニ相成、誠ニ一宗之是非、此度之糺ニ而相極候様相心得、殊之外存詰候躰へ相見申候間、色〻申宥、本山御使僧江茂糺之儀暫差留置候、永く差留候ハヽ見越候儀ニ者御座候得共騒立可申哉、既門徒とも申立ニも多人数罷出、御使僧江可相願哉之趣も相聞候間、騒〻敷可相成儀も難計御座候、先達而右惑乱之儀ニ付奉伺候之処、御附紙を以被仰渡候趣も御座候得者、強而利害申聞、彼是申立候儀者差押糺為請候様可仕哉、併穏便之取計ニ者難行届趣相見江、尤門徒共御使僧江申立候儀茂法中同様之趣ニ付、為御見合法中ゟ差出候書付写相添、此段奉伺候、以上

戸田采女正家来

十一月　林藤兵衛

書面宗意一件之儀、去酉十二月以来御問合有之、取治方之儀本山江可申遣趣意、度〻築地輪番江申渡置候間、法中ニ而難相治筋茂有之候ハヽ、早速門跡ゟ申立茂可有之処、今以何等之被申立茂無之候付勘弁いたし候処、濃州村〻末寺共申立之通本山学校能化浄教寺、其外重立候僧侶之内、三業儀則之新義講談いたし候故、所〻ニ而宗意惑乱いたし候様成行候儀与相見候を、右僧侶共者其侭差置、末〻を何程相糺利害等申聞候共、可相治筋無之者勿論之儀ニ而、迚茂本山之取計ニ而已任セ置候而者、相治間敷哉之趣意茂相聞候間、今般伺之上濃州表江被差向候使僧為引払、三業儀則又者心得違之講談いたし、宗意二途ニ相成候次第急速ニ被申立候様、西本願寺江申達候間、右始末被申立候上、取治方等之儀も沙汰およひ候積ニ候間、今般願出候末寺門徒之もの江茂、宗意二途ニ相成候訳者本山之膝元より糺之上、其品ニ寄奉行所又者本山より可及沙汰候間、今般被差向候使僧引戻之儀も奉行所ゟ本願寺へ相達候間、其旨相心得、追而之沙汰を可相待旨、得与利害被申聞候様存候

戌十一月

願書控　壱通

伺書控　壱通

御三分

法中

廿四

乍恐奉願上候

此度御糺之儀者、大垣御預所并御領分御分地計ニ而他領惑乱之儀者、僧侶共御糺無御座候段被仰聞候、然処当国御安心惑乱之儀者、右御三分而已ニ而ハ無御座候、手次寺者大垣御領内ニ而門徒者他領、或者門徒者大垣御支配ニ而、手次寺者他領ニ罷在候類数多御座候得者、今般右御三分ニ限り御糺有之候とも、御三分者勿論一國之治りニ者難相成、其上右躰他領之分曽而御糺無之趣而者、大垣御支配所計惑乱仕候筋ニ相当、第一御領主御政事方不行届哉ニ相聞、奉恐入次第ニ御座候得者、右之段何卒御高察被成下、当国一同御糺御座候様仕度、且当国惑乱与申茂御本山御膝元より差起り候儀ニ御座候得者、仮令国内一統御糺被成下候共、御本山御手元是迄之通り御差置、当国御糺有之候而も真之治りニ者難相成候間、別紙之趣具ニ御しらへ被成下候上、御糺奉請度候間、乍恐此段御賢察之上、右願之通御聞済被下置候様連印を以奉願上候、以上

享和二年戌十月

大垣御預所

同　御領分

同　御分地

同志法中

御使僧

西光寺殿

乍恐口上書を以奉申上候事

一御当流御安心之儀者、祖師聖人以来御代〻之大善智識被為在御相承、一天四海古今不易ニ御弘通被為遊被下難有奉存候、然処近来於諸国種〻之異解申立、既ニ御聖教之御所判無御座三業たのミ等之僻刀法門流布仕、致惑乱候事ニ御座候、夫ニ付当国之儀茂御安心二途ニ相分レ、同様惑乱追日致増長候而惑乱仕候、然処今度従御本山深重之思召を以、右惑乱為御取治御使僧被差向、冥加至極難有仕合奉存候、左候得者片時茂早ク御安心御調御取治被下度奉存候、夫ニ付乍恐私共会得仕兼候儀ニ御座候ニ付、御糺被仰聞被下候、以前其儀を奉伺候間、御弁別被成下篤与御解宗敬承仕候上ニ而、奉蒙御糺候ハヽ、難有可奉存候、依之不顧恐御伺申上

候、尤私共兼而領解仕罷在候一途を以門徒教化仕候得共、
今更私意を以是非決抔難仕儀御座候ニ付、其趣意左ニ相認
奉伺候間、具ニ被仰聞被下度候

一当夏中学林代講師越中国義霜臈満講弁ニ、去春以来度〻大
善識(智脱カ)御歎斥被為遊候三業之儀則を被致穿鑿、別而五月十九
日講談ニ者各立三業之儀強盛ニ被申演候段、聴講仕候者数
多有之、即聴記茂所持仕罷在候、右三業たのミ等之儀者、
末〻ニ而も決而沙汰仕間敷儀を、於大講堂ニ右躰被致弁述
候事、近ク御高判并御直裁等を破斥被致候筋ニ相当り候哉
奉存候、将又当春ゟ御法義取鎮之被蒙役儀候学林古臈八僧
中、義霜日〻之講弁を乍致随聞、三業所礼之儀其侭ニ被差
置候事、右之族者旧蠟廿七日之御直裁者如何被相心得候哉、
是又未審敷奉存候、右等之趣等閑ニ被成置候而、於当国三
業たのミ等専相勧候族而已御糺明被成下候ハヽ、都鄙各別
之御儀ニ而乍恐如何ニ奉存候間、此段奉申上候

一当春以来数ヶ国より被願上候儀御座候由ニ而、六月十七日
被仰出候三ヶ條之御趣意、愚昧之私共一統乍恐会得仕兼候
ニ付、同月下旬諸国同意惣代拾八人之者ゟ御伺書奉差上候、
当国之儀者去年以来御本山江度〻御願申上、将又就其儀ニ
御領主之御苦労筋ニ迄相成罷在候程之事ニ御座候故差控罷

在候、然ル処九月朔日御書付を以被仰出候趣、同志在京之
者ゟ写壱通相下シ候故拝見仕候処、当六月・九月両度之被
仰出二途之趣与承知仕候、ヶ様ニ被仰出茂応願ニ不一準候
様奉存候、弥以正不難相分同志之者心配仕候、右之趣御弁
別敬承不仕候内者、愚昧之私共真偽相紛レ邪正不分明ニ而、
此度如何躰御尋御座候而も、乍恐否御答難申上迷惑仕候尓
付、無拠此段奉申上候

一近年安心二途ニ相分、於諸国種〻及諍論候儀者、御能職京
都浄教寺智洞師、兼而門弟中江被致指授候入門六条与申書
御座候、此書者遠者高祖聖人以来御相承之正義ニ違し、近者
去春被仰出候御高判之御趣意ニ相違仕候、然ルニ右之門弟
中彼書之趣を以於諸方ニ三業たのミを荒涼ニ相弘候故、争
論差起り候儀ニ御座候、加之右御同人自得安心大善智識御
相承ニ違戻仕候儀者、去〻申之冬ゟ去ル酉之春迄御連枝恵
光院様御子細御座候由ニ而、御安心之儀ニ付毎度御懸合御
贈答被為在候処、終ニ浄教寺殿伏道理ニ自筆を以相認メ、
御連枝恵光院様江被差上置候書類数通御座候而、邪正明白
ニ相分レ、浄教寺殿不正義ニ相決候由兼而承知仕候、乍然
不容易儀軽率ニ申上候茂如何与差控罷在候得共、右之趣聊
相違無之旨所〻ニ而申立候ニ付、私共同志之内両三人御連

枝恵光院様江参上仕、右之始末御伺申上候処、毛頭相違無之、浄教寺殿自筆之書類御所持被為在候儀御直ニ被為仰聞被下候、左候得者学頭之身分として御相承ニ無之三業安心新法を相弘メ候事言語道断之儀ニ而、御安心惑乱之張本、御本山御苦労之根元者只浄教寺殿壱人ニ相決、且又去酉年夏中学林之致方并京・大坂講中御本山江強訴仕候事、皆浄教寺殿心得違ゟ事起り候旨承知仕候、尤当春江戸表おゐて菅沼下野守様ゟ被仰付候趣者、当時本山御吟味中之事故、於同所ニ早ゝ御糺心得違之末寺方夫ゝ被仰付可有之旨被仰渡候由承知仕候、然ルニ御相承之御安心を為致惑乱、且職分ニおゐて決而有之間敷謀計を廻し、御本山御難題筋被相企候不忠之人躰、御先例之通御寺法之御取計可被仰付之所、右躰心得違之根元御膝元之浄教寺殿を其侭ニ被成書(置カ)候而、当国三業安心枝葉之者共計今般以御威光御取鎮被成下候共、三業たのミ再発仕候儀者乍恐必然之儀ニ御座候、左候時者又ゝ争論差起惑乱仕候節、御領主江対し御本山御役人中御取鎮メ方等閑之道理ニ相当り、第一御本山御鍛(ママ)瑾之筋ニ相聞へ可申哉与奉恐入候、及其期私共ニおいて御領主江対し一言之申上様茂無御座候ニ付、惑乱再発不仕様根元之御糺明被成下度奉願上候、右奉申上候儀毛頭人我を相募候儀ニ者無御座、唯偏ニ御本山御大切ニ奉存候上ゟ、片時も早く御膝元を始御門末一統御法義争論御取鎮、永久静謐ニ相治り候様奉念願候、且者銘ゝ共出離之一大事ニ相拘候儀ニ御座候得者、何卒僧俗一味之領解ニ相成、無親疎相潤ひ法義相続仕、御意・御法度不相背様仕度奉存、必願恐奉願上候間、前箇条之趣御寺法之御取計被仰付候而者、真之治りニ者相成不申候間御高察被成下、逐一御糺之上ニ而、当国御安心惑乱御取鎮被成下度奉願候、仍連印を以奉願上候、

以上

享和二年戌年十月　　大垣御預所
　　同　御領分
　　同　御分知
　　同志法中

御使僧
　西光寺殿

十一月

一左之懸合書別紙帳面とも弐冊請取之

脇坂淡路守殿　　石川左近将監

西本願寺ゟ使僧被差向候儀ニ付、別紙之通戸田采女正殿御預り所役人伺書差出申候、去酉十一月以来追〻及御懸合候通、濃州右一派僧俗とも人気不穏趣ニ相聞候処、此度法中とも申立候趣意宗法筋ニ付、不差構抔御預り所ニ而為申渡候ハヽ、使僧江対し及不法、右ニ付候而者百姓共迄騒動致間敷とも難申、法中共之書面之趣意致勘弁候処、尤之趣意ニ相聞候間、右書面有之候京都浄教寺等本山ニ而厳敷申付、本山之膝元より改革有之候振合ニ無御座候而者、相治り申間敷筋とも相見申候、此度濃州江被差向候使僧者引戻之儀等、築地輪番江被仰渡候御振合ニ者不相成筋ニ候哉、御預り所役人差出候本紙二冊相添、及御懸合候差図之振合等、委細被仰聞候様仕度候、以上

戌十二月

御書面之趣令承知、別紙を茂致一覧候処、去酉十一月以来御懸合有之、取治方之儀本山江可申遣趣意度〻築地輪番江申渡置候間、法中ニ而難相治筋も有之候ハヽ、早速門跡ゟ申立茂可有之処、今以何等之被申立茂無之候付勘弁いたし候処、濃州村〻末寺共申立之通、本山学校能化浄教寺其外重立候僧侶之内、三業儀則之新義講談いたし候故、所〻ニ而宗意惑乱いたし候様成行候儀ト相見候を、右僧侶共其侭差置、末〻を何程相糺利害等申聞候共、可相治筋無之者勿論之儀ニ而、迚茂本山之取計ニ而已任セ置候而者、相治間敷哉之趣意茂相聞候間、今般伺之上濃州表江被差向候使僧者為引払、三業儀則又者心得違之講談いたし、宗意二途ニ相成候次第急速ニ被申立候様西本願寺江申達候間、右始末被申立候上取治方等之儀も及沙汰候積りニ候間、今般願出候始末門徒之もの江茂、宗意二途ニ相成候訳ハ本山之膝元より糺之上、其品ニ寄奉行所又者本山ゟ可及沙汰候間、今般差向候使僧引戻し之儀も、拙者共より本願寺江相達候間、其旨相心得、追而之沙汰を可相待旨得与利害可申聞段、御差図有之候様存候

戌十一月

脇坂淡路守

西本願寺宗意惑乱ニ付、為糺本山御使僧参着之処、寺院并門徒共彼是願筋申立候ニ付伺書

廿六

戸田采女正

御預所

先達而追〻奉申上候西本願寺宗意惑乱一件、為糺今般本山ゟ御使僧西光寺大垣城下江被差向候処、右西光寺儀役人共江面会申聞候者、戸田采女正御預所領分并戸田淡路守・同寛之丞江分知村〻、此三分之法中を相糺候由、然ル処右三分ニ有之寺〻之門徒御他領ニ茂有之、又御他領之寺方之門徒ハ三分ニも御座候而、入跨候門末惑乱ニ付、御他領一同申立候処、右三分計糺候由可相治筋与茂不相見候得共、右之段彼是及懸合候内、段者延(ヽカ)引ニ相成候故、右等之儀者追〻糺中ニ而も懸合方可有御座奉存候間、先ツ糺取懸有之候様相達置候処、右三分之法中ゟ別紙写之通御使僧江及懸合、返答承り候上糺請度旨ニ付而者、差続門徒共儀右同様之趣意、其外本山ニ宗意二途有之旨及承候事とも種〻申立、御使僧江懸合仕度、是又否之返答承候上糺請度旨、右門徒

共役所江申出候、右者去年以来本山之取計方手間取候故、愚昧之もの共段〻申募候事ニハ候得共、俗人ゟ申立候者如何敷筋ニも有之哉ニ相聞、其上本山之糺を請間敷との儀ニ者無之、右之答糺以前承度との儀ニ御座候得共、中〻御使僧即答可有御座儀共不相聞、彼是延引仕候而者本山之糺を請兼候筋ニも近寄候哉ニ付、於役所承届差免候事も難仕、色〻利害申聞候処、兼〻奉申上候返(ママ)候通至而差はまり、強く殊更門徒より申出候ハ、何れ之村方ニ茂新古入交り居候付、互ニ宗意安心向是非を争候内、我意を申募、気肌相離、内心ニ憤りを含、村内者勿論親類縁者等迄も不睦候様相成、夫婦離別等出来仕、彼是人気不穏、右之振合ニ而遺恨相重り、追日惑乱増長仕、自然与諸向差閙難相治難渋ニ相迫候段申立、此度美濃方糺之儀者手始ニ而、不行届時者諸国同志之もの迄も差障りニ相成、誠ニ一宗之是非此度之糺にて相極候様相心得、殊之外行詰り候躰ニ相見申候間品〻申宥、本山御使僧江茂糺之儀暫差留置、先此段奉申上候、永ク差留候ハヽ見越之儀ニ者御座候得共、騒立可申哉、既ニ門徒共申立ニも多人数罷出、御使僧江可相願哉之趣も相聞候間、騒〻敷可相成哉者難計御座候へ共、先達而右惑乱之儀ニ付奉伺候処、門徒共江者支配役所ゟ利害申聞候様、御附紙を

以被仰渡之趣茂御座候得共、強而利害為申聞、彼是申立候儀者差押糺為請候様可仕哉、穏便之取計者難行届趣相見候、尤門徒共御使僧江申立之儀茂法中同様之趣ニ付、為御見合法中ゟ差出候書付写相添、此段奉伺候、以上

戸田采女正家来

戌十一月　林藤兵衛　印

西本願寺宗意惑乱為糺被差向候使僧江法中惣代ゟ差出候願書写

此帳面十一月九日之処へ有之故爰ニ略之

十一月十二日

一左之通備前守殿江直達即日承附候様、播磨殿江御下ケ承付いたし、翌十三日御同人江以秋山松之丞再達

濃州村々西本願寺末寺門徒宗意心得方之儀ニ付、取計方伺書

書面伺之通取計輪番江

申達方之儀者、猶又可相伺旨

被仰聞承知仕候　脇坂淡路守

「西本願寺宗意惑乱一件」文書を読み解く（第一年次）研究報告

戌十一月十二日

濃州村々西本願寺末寺并旦家共之内、宗意心得違之もの有之、古義方・新義方与両様ニ引分れ相互ニ誹謗いたし、師匠寺之宗意相違之由申立、安心之儀得道相成候様申懸候得共、容易ニ宗意申解候而茂争論出来可仕哉与遠慮いたし候歟、何れ共不申解趣ニ而、百姓共一同自然与農業も怠候哉ニ相聞、勿論右宗意心得方之儀本山糺中ニ付、百姓共彼是申立候者心得違ニ付差押置候得共、本山非義与心得、或者師匠寺之教をも不相用もの共有之程之儀ニ而、聊之心得方ニ而後世ニ拘候儀片時茂難捨置儀与一途ニ存詰候もの共故、本山之糺長引候ハヽ、本山又者師匠寺江対し、愚昧之もの共万一立騒可申哉も難計候間、精々利害ハ申聞候得共、百姓共心服致間敷哉ニ付、取計方去酉十一月中采女正殿御預り所役人ゟ御勘定奉行江申立、取計方之儀私方江懸合有之、領分之方者同十二月御同人家来ゟ問合候ニ付、右教化方之儀者本山吟味中之事故、早々相糺心得違之末寺共者夫々申付、本山江願出候百姓共江茂利害申聞、帰村為致候ハヽ、相治可申筋与奉存候間、右之趣夫々本山江申遣候様、西本願

寺輪番江当二月申渡置候、然処采女正殿御預所并領分・分知此三方之法中宗意一件為糺、濃州表江西本願寺使僧西光寺罷下り候由之処、右三方ニ有之候寺〻之旦家他領ニ茂有之、又者寺〻門徒之領主茂違ひ、他領入組有之宗意之儀ニ付而ハ一同之申立候処、右三方計相糺候迚可相治筋与も不相見、三方之寺院而已相糺候迚一国之治りニ者難相成、近年安心向両様ニ相分れ、於諸国種〻及争論候儀者、能職京都浄教寺与入門六ヶ条与申書有之、祖師之相承ニ違ひ、右之書を以三業を相弘候故、争論起不相治儀ニ候処、学頭身分与して祖師之相承ニ無之三業安心新法を相弘候事、言語道断之儀ニ候処、右浄教寺者其侭差置、枝葉之もの計取治有之候共、再発可致者顕然ニ而、一統取治ニ無之候而者難相治筋ニ候処、浄教寺ハ其侭差置候訳使僧西光寺江及懸合答承候上、糺請度旨僧俗共領主役所江申出候得共、右使僧即答可致儀とも不相聞、品〻利害申聞候得共、僧俗共一途ニ存詰罷在、殊更村方ニも新古入交り居候ニ付互ニ宗意安心向申争、村内者勿論親類等迄も不和ニ相成、人気不穏此上増長いたし候而、其外〻江茂閣難相治難渋ニ迫り候段申立、此度美濃方糺之儀者手始ニ候間、不行届節者諸国同志之もの共迄茂差障ニ相成、誠ニ一宗之是非此度之糺ニ而相

極候様心得、殊之外存詰候躰ニ相見候間、本山使僧江茂糺之儀暫差留候得共、此上騒立可申茂難計、既門徒多人数罷出使僧江可相願趣ニ茂相聞、騒〻敷可相成様子ニも相聞候間、取計方之儀采女正殿御預り所役人与御勘定奉行江茂申出、取計方石川左近将監与私方江懸合有之、領分之儀茂右家来より問合候ニ付、依之勘弁仕候処、本山学頭浄教寺三業之新法を勧候当人ニ候処、其侭差置、末派之もの共而已相糺候而者、右三業方之もの共も屈服致間敷、此上強而使僧之糺請候様御預所并領主役所与申渡候ハヽ、騒立間敷共難申、勿論先達而取治方之儀早〻本山江可申遣旨輪番江申渡候節、興正寺本末論一件ニ付、出府いたし罷在候西本願寺使者七里内膳并使僧寒松寺・実相寺儀も、右濃州表其外共宗意取治方之儀ニ付、本山役人共人少病気之もの等も有之、安心不致候ニ付上京之上、夫〻申談取計度旨願出候ニ付承届、先達而其段申上置候儀ニ而、夫〻取治之上委細可申出旨、輪番共より当七月中申立有之候得共、今以否も不申出候間、猶又取治方之儀輪番江一通りニ相達、書状等ニ而申遣候而者遠国差跨埒明申間敷、取治方手間取候ハヽ、弥増長いたし、品ニ寄騒立可申哉も難計ニ付、美濃国中寺院共申立之通本山学頭浄教寺心得違之儀茂候ハヽ、厳敷咎申付候

歟、又者本山役僧等之内右新義を勧候本人を咎申付候上、諸国も右ニ准し取計不申候而者、枝葉而已之糺ニ而者難相治儀も相聞候間、此段輪番共之内壱人上京いたし、奉行所ゟ達之趣御門跡江も申達候様可取計旨輪番江申渡、問合有之候向江も新義を企候当人共を相糺候上、諸国取治茂可有之候間、夫迄相待候様利害申聞置候様挨拶可仕候哉、此段相伺申候

戌十一月

一播磨殿より以使者期進達いたし候書面承附候様、備前守殿秋山松之允を以被仰聞候ニ付、左之趣申来

備前守殿松之允を以御下ケ被仰聞候者、浄教寺并其外江も被仰遣方者、今少し厳敷被仰遣可然由、尤被仰遣振一応御伺被成候様同人申聞候、且又右ニ付候而者明日御登城之上、猶同人御懸合御座候得者、宜敷旨同人申聞候

十一月十三日

一昨夜播磨殿ゟ被申越候趣を以承附いたし、今期持出、秋山松之允江懸合候処、取調之通ニ而可然旨申聞候付、則備前守殿以同人再達、尤下江達方之儀ハ取調候上、猶相伺候様

同人申聞

一星野鉄三郎儀罷越、築地輪番江申渡書取調之

築地本願寺輪番

一依召参上　光恩寺

京都於本山能化并学林八僧臈満与相唱候訳、且恵光院・浄教寺智洞・学林義霜与申もの、いつれ之もの共ニ候哉之段役人を以相尋候之処、即刻左之通相認差遣之

廿八

一京本山学林能化・所化・臈満並ニ八僧中与(ママ)事御尋ニ付、左ニ申上候

一学林与申ものハ本山之学校ニ而、日本国中一派之所化集会仕候処ニ候、就中能化職之儀ハ一宗学道之師範ニ而、重き身分之ものニ而、本ゟ開山聖人已来代々相承して、一宗之安心・掟等教導之趣き御門主ゟ教示御座候を、能化職之もの挙承之次第々ニ末々所化中及教示候御儀ニ候、抑結夏与申候而、四月十五日ゟ七月十五日一偈九十日之間、一宗所依之経論(経カ)疏記致講釈候、然ニ能化壱人ニ而病

気其外難相勤次第も御座候故、本講・次講与名ケ各日ニ相勤候、尤所化中相集学林之席ニ而講釈承り候事を懸席与申候而、壱年相詰聞海致し候ものを、壱年席与申、乃至五年之ものを五年席与申候、七年之ものを耆年与相名ケ、十一年之者を上座与相名ケ申候、十六年懸席満し候ものを臈満与申候、戒臈備足之儀を取候而相名ケ候儀ニ候、其中能化致講釈候を本講与申、臈満共能化に次て講じ候を次講与申候

一八僧中与申者有之哉之御尋、此儀ハ前ゝ不承名目ニ而一向様子不奉存候、然し於学林今夏中ゟハ八僧中与申者こしらへ候而、末寺所化中教示之行き御座候由有之趣ほのかに承候得共、慥ニ不奉存候儀ゆへ然与難申上候、右存罷在候通奉申上候、以上

一慧光院殿之御事御尋被遊候、是者摂州小浜毫照寺殿候処、別紙之通之僧分ニ可有御座儀与奉存候、何分急御取計可被下候、右申上度如此御座候、以上

十一月十三日

口上書

覚

当本山末

越中国射水郡氷見

西光寺

義霜

右之通御座候、以上

本願寺築地輪番

十一月

光恩寺

同十四日

一去ル十二日備前守殿江進達いたし候書面、今日同役衆一同江為見之、一躰手続之趣委細申述之、左之伺書相談およひ候処、存寄も無之候付、備前守殿ヲ以秋山松之允進達之

別紙与二通一帯

濃州村ゟ西本願寺派僧俗宗意心得方之儀ニ付、輪番江申渡候趣申上候書付

脇坂淡路守

濃州村ゟ西本願寺一派僧俗宗意心得方取計之儀、伺之通可仕旨被仰聞候ニ付、別紙之通西本願寺輪番江申渡候様可仕候、依之此段申上候

廿九　戌十一月

西本願寺輪番江申渡書案

先達而一通り申達候濃州村ゟ末寺門徒之もの共、古義方・新義方与両様引分れ、今以宗意惑乱いたし不相治候処、今般右為取治使僧被為向候ニ付、猶又古義方僧侶共領主等江申立之趣者、当夏中本山学林ニおゐて学林代義霜三業之儀則を穿鑿いたし、同五月十九日講談ニも三業之義則を専ニ

三十

申述、聴聞いたし候もの数多有之、三業頼等之儀者末ゟニ而も決而沙汰致間敷儀を、本山之講堂ニおゐて相弘候而者、高判并直裁等を相破り候筋ニ当り候を、法義取鎮之役儀を引請候学林古蹟・八僧并義霜等を其侭ニいたし置候段不審之至り、当春以来数ヶ国ゟ本山江願出候由ニ而、当六月十七日御門跡より被仰述候三ヶ條之趣意、愚昧之もの共会得いたし兼候由、其外当九月朔日御門跡より書付を以達之趣与、右三ヶ条与ハ二途之趣ニ承知いたし、右躰真偽邪正不分明ニ而者、此度如何様之尋有之候共答難致由

一近年安心二途ニ相分れ、於諸国種ゟ及争論候様、元者京都学林能化浄教寺智洞兼而門弟江入門六条与申書を指授いたし、此書祖師已来相承之正義并去春出候高判之趣意ニも違、右躰浄教寺門弟共六条之書を以於諸方三業頼を相弘候故、争論差おこり候、然処去ゟ申冬より連枝恵光院ゟ再応掛合之上、浄教寺不正義ニ相決候趣者、数通之書状等有之由

一去酉夏中学林之致方并京・大坂講中ゟ本山江及強訴候事、皆浄教寺心得違より事起り候由

右之通新義を弘候教頭之浄教寺者、何之咎等も無之段会得難致候間、右始末御使僧江承り候上、糺請度旨門徒共茂一同申立、何れ之村方ニも新古入交り有之、互ニ宗意安心向

是非を争候内ニ者我意を申募り、親類縁者等も不睦様相成
人気不穏、此上相重り増長いたし、自然与諸事ニ閊難相治
難渋ニ迫り候段申立、此度美濃方糺者手始ニ付、不行届時
者諸国同志之者共迄も差障ニ相成、誠ニ一宗之是非此度之
糺ニ而相極り候様心得、殊之外存詰候躰ニ相見、領主役所
等ゟも品々申宥、使僧糺之儀延置候得共、永差留候ハヽ騒
立可申哉者難計、既門徒とも申立ニも多人数罷出、使僧江
可相願哉之趣も相聞、騒敷可相成様子之由相聞候由
右者美濃国村々西本願寺派僧侶一同之申立ニ候、祖師ゟ相
承之宗意二途者有之間敷、当時二途ニ引分れ候上者、何れ
一方共新義又者不正義ニ可有之処、去年来奉行所ゟ取治方
之儀相達候処、其糺手間取今以落着不致故、百姓共騒立可
申次第ニ相成候段如何ニ相聞候、美濃国中之もの共申立之
趣ニ而者、浄教寺甚不埒ニ相聞候、併右者一方之申立故治
定者不致儀ニ候得共、いつれニも本山学林之内ニ三業頼之
新義を相弘候僧侶有之ニ無紛処、右躰之もの其侭被差置、
末々之ものを何程相制候迚屈服可致道理無之者勿論ニ候、
若御法中ニ而難相治趣意も有之候ハヽ、公儀江可被仰立事
ニ候、愚昧之門徒共従来祖師相承之宗意与相心得信仰いた
し罷在候を、同宗之内ニ而三業頼抔与新規之儀相弘候而者、
宗意惑乱いたし候者尤之事ニ相聞、右ニ付後世を取失片時
も難捨置心得、此上之取計ニより宗意より事起、百姓共騒
立可申哉も難計程之事ニ相成候段不容易儀ニ而、法義筋与者
乍申、品ニ寄公儀ニおゐて其分ニ難被差置次第ニ候間、濃
州表江被差向候使僧者為引払、三業儀則又者宗意心得違之
趣を講談いたし、宗意二途ニ成候起りを急速ニ被遂糺明、
其始末先可被仰立候
右者伺之上御老中方御差図を以相達候間、其方共之内壱人
早々上京いたし、御門跡江可申上候

戌十一月

十一月十五日

三十一

一備前守殿秋山松之允を以、昨日進達いたし置候西本願寺輪
番江申渡書案書面、播磨殿江御下ケ有之、右申渡書案察度
之廉別紙認、今一応相伺候様被仰聞候段直書ニ而申来、別
書進達引送り来ル

十一月十六日

一昨日播磨殿直書を以被申越候之趣勘弁いたし候処、察度之
廉計別段ニいたし候而難相分処も有之候故、猶又別紙之通

取調秋山松之允江懸合およひ進達いたし候処、今日之書面之方至極急之由ニ而、即刻承附候様被仰聞、依之昨日進達之書面ハ不用ニ相成

但申渡之儀ハ別席ニ而可申渡旨、且申渡相済候後、自分ゟ宗意之儀ニ付奉行所ゟ度〻取治之儀達も有之候処、此度右躰被仰出候段甚如何之儀ニも有之、得与利害申聞候様被仰聞之

戌十一月十六日備前守殿江秋山松之允を以進達、即刻承附候様被仰聞承附いたし、翌十七日以同人再達

三十三

濃州村〻西本願寺派僧俗宗意心得方之儀ニ付、輪番江申渡候趣申上候書付

書面別紙之通可申渡旨被仰聞承知仕候

戌十一月六日　　脇坂淡路守

三十二

濃州村〻西本願寺一派僧俗宗意心得方取計之儀、伺之通可仕旨被仰聞候ニ付、別紙之通西本願寺輪番江申渡候様可仕候、依之此段申上候

戌十一月

西本願寺輪番江申渡書案

濃州村〻西本願寺派僧俗共古義・新義与二途ニ引分れ、宗意及争論人気不穏、当時本山学頭浄教寺智洞ゟ祖師相承之正義ニ違ひ候入門六条与申書を門弟共江相授、三業之儀則を為相弘、又者本山学校ニ而も近頃専新義を講談いたし候故、諸国一派之者共及争論、此節濃州表江使僧被差向候得共、右躰本山ニおゐて新義乍相弘、末〻を可相糺与之訳会得不致事故、右之趣意不承内ハ糺難請抔、僧俗一同申立及難渋候趣ニ相聞候、祖師相承之宗意二途者有之間敷、当時二途ニ引分れ候上者、いつれ一方者新義又者不正儀ニ可有之処、去年来奉行所より取治方之儀相達候処、其糺手間取今以落着不致故、百姓共騒立可申次第ニ相成候段如何ニ相聞候、美濃国中之ものとも申立之趣ニ而者、浄教寺甚不埒ニ相聞候、併右者一方之申立ゆへ、治定者不致儀ニ候得共、いつれニも本山学林之内ニ三業頼之新義を相弘候僧侶有之

ニ無紛敷、右躰之もの其侭被差置、末ゝ之ものを何程相制候迚屈伏可致道理無之者勿論ニ候、若御法中ニ而難相治趣意も有之候ハヽ、公儀江可被仰立事ニ而、愚昧之門徒共従来祖師相承之宗意与相心得信仰いたし罷在候を、同宗之内ニ而三業頼抔与新規之儀相弘候而者、宗意惑乱いたし候者尤之事ニ相聞、右ニ付後世を取失片時も難捨置心得、此上之取計より宗意ゟ事起り、百姓共騒立可申哉も難計程之事ニ相成候段不容易儀ニ而、法義筋与者乍申品ニ寄公儀ニおゐて其分ニ難被差置次第ニ候間、濃州表江被差向候使僧者為引払、三業儀則又者宗意心得違之趣を講談いたし、宗意ニ途ニ成り候起りを急速ニ被遂糺明、其始末先ツ可被仰立候右者伺之上御老中方御差図を以相達候間、其方共之内壱人早ゝ上京いたし、御門跡江可申上候

戌十一月

十一月十七日

一昨日進之書面江承附いたし、備前守殿江以秋山松之允再達之

但承付ハ昨日之処ニ認有之

築地

本願寺輪番

光恩寺

教宗寺

一依召参上

右明十八日五時自宅内寄合江可被罷出候

三十四

十一月十八日

一今日内寄合於列席左之通申渡

呼出

西本願寺輪番

一向宗

光恩寺

一

同輪番

同宗

教宗寺

別紙申渡

申渡

西本願寺輪番

光恩寺

教宗寺

申渡書前ニ記ス進達之通故略之

三十五

一去ル九日采女正殿家来林藤兵衛差出候問合書答下ケ札取調之、今日同人呼出相達之

但書面者前ニ記故略之

一去ル十一日石川左近ゟ受取候問合答下ケ札取調、今日以手紙相達之

但同断

十一月十九日

一此間ゟ追〻取調進達いたし候扣并石川左近ゟ之問合答、采女正殿家来問合答下ケ札扣廻し、今日持出同役衆江相廻之

築地輪番

光恩寺

一

右罷出昨日申達候上、京之儀ニ付口上ニ而役人迄申聞候付、委細書面ニいたし差出候様申達之

同役僧

一左之書面壱通差出役人請取置

専念寺

口上覚

三十六

濃州表法義筋之儀ニ付、昨日御内寄合御列座ニ而、輪番両人之内壱人致上京、右之趣御門主江可申上旨被仰渡奉畏候、右ニ付光恩寺上京仕候、尤早速出立可仕候処、此節配下之儀ニ付しらへ懸候用事茂御座候、且者道中用意も仕度奉存候間、六七日之間御猶予被成下候様仕度、此段奉願候、御憐察を以宜御沙汰可被成下候、以上

本願寺築地輪番

十一月十九日

教宗寺

光恩寺

寺社

御奉行所

十一月廿四日

築地輪番

光恩寺

一左之書付差出

口上覚

濃州表法義筋ニ付、去十八日於御内寄合御席上京可仕旨被仰渡候、依之光恩寺明後廿六日出立上京仕候ニ付御届申上候、尤同寺留守中教宗寺壱人ニ而御用向相勤申候間、是又御届申上候、以上

本願寺築地輪番

十一月廿四日　教宗寺

光恩寺

寺社

御奉行所

十一月廿五日

一左之小札持出同役衆江相廻之

戌十一月廿四日

濃州表法義筋之儀ニ付、去ル十八日於御内寄合相達候趣も有之候付、光恩寺儀来ル廿六日出立上京いたし候間、留守中教宗寺壱人ニ而御用向相勤候段届出承置候

築地本願寺輪番

光恩寺

脇坂淡路守

一濃宗表法義筋之儀ニ付、先達テ伺済之趣築地輪番江相達候処、光恩寺儀明廿六日出京上京いたし候旨届出候、右者御届等不致心得之旨秋山松之允江懸合候処、御届ニ不及旨同人申聞之

十二月五日

一左之問合書差出同十一日答下ケ札相達之

永井山城守家来

小嶋恒右衛門

永井山城守領分

美濃国厚見郡

六条村

西派一向宗

慶善寺

上茜部村

同　浄性寺
西鳥屋村
同　西福寺
北鳥屋村
同　快楽寺
清村
同　善超寺
下川手村
同　順勝寺

右六ヶ寺為惣代浄性寺・快楽寺申出候者、諸国之寺ゝ宗門安心之儀、古流・新流与二途ニ相成彼是差揉候処、就中摂州・濃州別而差揉、去酉年中摂州十三日講古流之寺ゝ与京都本山江御裁断書相願、御門跡より御書被差向候処、当国ニ而も戸田采女正様御預所并御領分とも古流之寺ゝ、其外近領之寺ゝ茂差揉候ニ付、凡百五拾ヶ寺程茂申談、摂州十三日講江被差向候御書招請申度之旨、此度連印ニ而願書本山表江差出申候、尤古流ニ而同志ニ付右之内江差加り候而、願書差出置候旨届書差出候処、近来国ゝ一向宗之寺ゝ門徒迄も二途ニ相成、及争論候趣も相聞候間、右届領主ニ而承置候茂如何ニ付、先書面者預り置申候、乍然宗法之儀者領主ニ而迚茂難及取扱候儀ニ付、右届之趣ハ承届候而茂不苦筋ニ可有御座候哉、依之右届書之写三通相添、無急度御問合申候様山城守申付越候間、此段御問合申上候、以上

十二月五日　永井山城守家来　小嶋恒右衛門

書面慶善寺外五ヶ寺届之趣
御聞被置不苦筋与存候
戌十二月

届書写　三通

口上之覚

一去酉之二月京都本山江摂州十三日講ゟ依願御書被差向候、
右之御書拙寺共江茂御招請申度奉存候ニ付、本山表相願申
上置候間此段御届申上候、以上

戌十月　下川手村　順勝寺
清村　河野善超寺
北鳥屋村　河野快楽寺
西鳥屋村　河野西福寺
上茜部村　河野浄性寺
六條村　河野慶善寺

寺社
御奉行所

御届申上候覚

一於諸国宗門之安心ニ付、邪義相弘候族有之候ニ付、摂津国
十三日講中ゟ本山江及出願候処、従御門跡様去ル享和元酉
二月御高判御差出有之候処、就夫当国ゟ茂右之御高判御指
向可有之候様及出願候処、拙寺共同志仕候、右申上候訳者
宗門之教化二途ニ相成候得者、門徒共迄も迷惑仕候上、近
者御領分町在迄も若惑乱仕候上、御役所迄も懸御苦労候儀
出来仕候而者恐入次第ニ奉存候、尤宗門之一大事ニ候故、
無拠拙寺共本山江及出願候事ニ御座候、右之段御届申上候、
以上

戌十一月　玄瀧寺　印
御奉行所

御届申上候覚

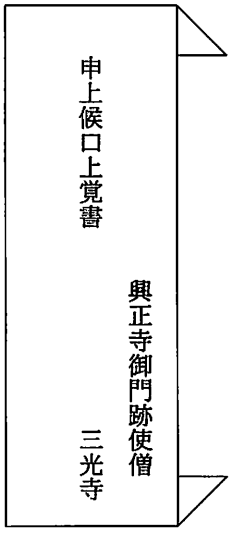
去酉年摂州十三日講より依願本山より御書被差向候、右御
書拙寺共御招請申度御座候間相願置申候、此段御届申上候、
以上

西鵜村
戌十月　福泉寺　印
中佐波村
等光寺　印

御奉行所

十二月十七日　　興正寺使僧

一左之書付差出之　　三光寺



内文段翌亥年二月八日之処ニ記爰ニ略之

四十

十二月廿四日　　西本願寺輪番

一左之書付差出　　教宗寺

口上覚

去月十八日御内寄合之節、濃劦表之儀ニ付私共之内壱人上京仕候様被仰渡、則光恩寺儀去月廿六日出立罷登候処、道中ニ而所労ニ罷在、当月十四日京着仕、直様右被仰渡之趣御門主江申上候処御敬承被成、猶追々被相調候趣御座候、此段御届申上候

亥正月　　本願寺築地輪番

寺社　　教宗寺

御奉行所

右書付翌二日持出、同役衆江及演説

四十一

口上覚

先達而被仰渡候濃州表法義筋之儀ニ付、光恩寺上京仕申上候処、御門主思召之趣光恩寺江委曲被仰含、旧臘廿七日京都出立仕、右一件同寺出府之上可申上旨被仰越候ニ付申上候、此段宜御沙汰

一右書付翌廿五日持出、同役衆江及演説

亥正月朔日

四十二

一左之書付差出　　西本願寺輪番　　教宗寺

様申越候、以上

十二月廿四日　　西本願寺輪番

寺社　　教宗寺

御奉行所

四十三

正月九日

戸田采女正家来

一左之趣届出之　　林藤兵衛

西本願寺宗意為糺、先達而本山より御使僧西光寺大垣江被差向候処、右西光寺御奉行所ゟ御沙汰之趣致承知、帰京いたし度旨申聞候付、勝手次第之旨及挨拶候処、旧臘五日大垣出立致帰京候旨、在所役人共ゟ申越候事

正月十五日

西本願寺輪番

四十四

一　　光恩寺

昨十四日致参府候之段届出并旧年被仰達候御答之儀、委細書面ニいたし、明後十七日迄可差出旨口上ニ而申出之

正月十六日

一左之廻し小札持出播磨殿江相達之

亥正月廿五日　　築地本願寺輪番

濃州表法義筋之儀ニ付　　光恩寺

上京いたし候処、昨十四日致帰府候旨届出候　　脇坂淡路守

正月十七日

西本願寺輪番

一左之帳面并書付差出之　　光恩寺

覚

一去冬月迫之時節ニ至り、諸国末寺共之内、学頭浄教寺弟子并同志之もの共三百六七拾ヶ寺計上京仕、此度従公儀被仰出候趣ニ付、本山ゟ浄教寺江故障之筋被仰付候ハヽ、騒立

四十五

可申様子ニ而在京仕居候故、今度伺之通取計仕候ハヽ、其以前右末寺共本山呼出し、帰国申渡候積ニ御座候、若多人数在京仕居候内ニ取計候ハヽ決而騒立可申、此段甚苦慮仕罷在候、尤末寺共多人数上京仕居候故、何時騒立可申哉難計御座候ニ付、其趣を以京都町御奉行江去臘御達被仰入置候、且又帰国申渡候共連〻帰国仕間敷哉、何分精〻取計帰国仕候様利害を以可申渡候得共、万一帰国不仕節者町御奉行江右末寺共帰国被仰渡被下候様、従御門主御頼入御座候而も不苦候哉、左候ハヽ乍恐其趣兼而京都町御奉行江被仰通置被下候様者相成申間敷哉、此上公儀御苦労不相成様静謐取計仕度、存意ゟ御内〻奉伺候

口上手扣

四十六

口上手扣

兼而被仰立置候通、興正寺ゟ其下寺江絵讃官職自剃刀差下し、新規之取計致増長、近年者我侭ニ近国之末寺共江高官差免し、加之和刕郡山光慶寺儀者興正寺下寺ニ御座候得共、古来ゟ当本山役寺ニ而、当時迚も役寺相勤罷在候処、右光慶寺江押而高官差免し候得共、本山役寺之旨申立達而断申入候趣、并一昨酉年大坂天満興正寺兼帯所江興本山と染込候幟建、為自称本山与申触候様相成候由を以、門末とも是迄毎度本山江訴出、興正寺新規不法之取計相止候様、無等閑急〻執計可申旨騒〻敷申出候得共、其節之公儀御吟味詰メ之趣并被仰立置候趣等申聞、何分騒立不申様精〻利害申聞置候得共、又〻末寺之内宜寺柄之もの共ゟ本山江訴出候趣ハ、公儀御吟味中興正寺ニおゐて、新規不法取計絵讃官職等被差免候得共、本山役人共曽而不及貪着、尤従公儀御察当茂無御座、依而弥興正寺方ニ而ハ如本寺被致執行候様成行ハ、全役人共捨置候故本山威光も衰へ、他宗他派江対し本山外分ハ勿論、門末共面皮ニも相拘り候由申、自然与本山を軽し、当時役人共無不甲斐故、何程本山御為を存訴出候而も不及貪着、捨置不取締成候役人共甚不相済候抔種〻ニ申触し、一体改派企之風評も有之、近頃ハ至而門末騒〻敷候間、右本寺執行御差留ニ相成候様、早〻公儀江不被仰立候而ハ諸国相治間敷旨申出候、折節法義筋差縺彼是打混、甚以取扱之障ニ相成迷惑仕候段御憐察可被成下候、右申上候通之趣ニ御座候処、法義筋ニ付改派相企候もの難計御座候間、法義筋并興正寺一件相済候迄、他之本山ゟ改派之儀御達申上候共、御聞請被下間敷旨御願被仰立候儀ニ

御座候、無録之本山門末ハ家録ニ候得者、相続ニも相拘り
候儀ニ付、無拠此段訳而申上候様被仰付候

口上覚

四十七

別紙伺之次第ニ取計候ハヽ、美濃国者相治可申哉与奉存候、
乍然諸国末寺共之内ニ浄教寺江同志荷担之末寺数多御座候、
其分者右浄教寺学頭職被取上候儀を心外存、本山江罷登
騒ゝ敷申出、役人共取計方悪口申、又者一方江対し無面目
存、終ニ本山を恨改派相企可申、依之諸国御国主・御領
主・御地頭江従当本山改派押届御頼可被仰入儀ニ候得共、
諸国之儀故急速ニ者難行届、其内ニ夫ゝ国元ニおゐて如何
体申合取企候哉難計御座候間、法義筋并興正寺一件相済候
迄、諸国一統末寺共他之本山より改派之儀御達申上候共、
御聞請被下間敷様御願被仰立候、此段急御沙汰可被成下候、
以上

本願寺築地輪番

口上覚

四十八

亥正月　光恩寺

寺社
御奉行所

右書面壱通二冊役人限受候置

亥正月十九日光恩寺持参差出候処、書面之内難分箇所有之候
ニ付、猶認置可差出旨申達、尤伺書共

法義筋差縺趣意書

内文談返物留ニ有之故略

伺書

内文談右同断

四十九

正月廿日

西本願寺輪番

一左之帳面四冊差出　　光恩寺

右役人請取置之

亥正月廿日輪番光恩寺を以被差出候宗意取計伺書

覚

五十

一去十一月十八日御列席に而濃州法義筋二途ニ成候起りを急速ニ遂糺明、其始末先ツ可被仰立様輪番共之内壱人早ゝ上京致シ、御門主江可申上旨被仰渡、則上京之上申上候処、御敬承之上被為入驚、早速夫ゝ江被仰付被相糺候趣、并当派一途之安心を二途ニ申成候趣意等具ニ可申上旨被仰付、拙寺帰府仕、則一途之安心を二途ニ申成候子細者別紙(イ印)を以申上候

一濃州ニ罷在候当本山門末教化かた心得違之儀有之門徒之百姓共、古義・新義と引分レ、品ニ寄り騒立可申様子ニ相聞、畢竟右ハ寺院之教化方心得違ゟ事起り不穏、依之宗意心得違之寺院并門徒之百姓共、早ゝ教誡之上宗意之趣会得為致候ハヽ、穏ニ相成可申与相聞候旨、一昨酉年十二月廿一日被仰渡候ニ付、美濃国法門糺し懸り役僧大雄寺・護念寺・法輪寺(祖般)、右三ヶ寺に而御座候処、護念寺儀者越前吉崎と申所ニ差継之儀有之、火急ニ被差下在京不仕候故、残り両寺相糺し候之内、月迫ニ及ひ候時節ニ付、先ツ学頭浄教寺并河州西念寺御咎被仰付置、翌春ニ至り段ゝ相しらへ候上、一昨冬諸国門末江従御門主被仰渡候教示等を以、美濃国江御使僧心鏡寺と申者為取鎮被差向候積にて、既に大垣・京都御屋敷御留守居江心鏡寺より其段御達申入、出立仕へき筈之処、其節在府七里内膳(広健)・寒松寺・実相寺ゟ法義筋為取鎮上京仕度旨御奉行所江願出候処、御許容被為在候故罷登候旨申登候付、若手違ニ相成候儀も御座候而者不相済候故、右三人之もの共上京仕候上、心鏡寺被差向可然与相見合罷在候内三人上京仕候而、美濃法義懸り役僧是迄取計之次第等段ゝ及相談、同国門末共大垣御役所江申立候趣難相分儀も有之候ニ付、寒松寺を以及御問合候而、同国門末上京之

儀申付候得共罷出不申、右之次第者去ル九月十七日書付を以申上候通之運ひニ御座候、尤美濃国懸り役僧共不念之取計も御座候ニ付、糺之上閉門慎被仰付候儀ニ御座候、其後猶又七月被仰出之趣も御座候故、精ゝ治り方示談之処、美濃国江為取鎮御使僧西光寺被差向候処、同国門末共西光寺江向申出候趣在之、彼是以手間取候内、又候去十一月十八日御沙汰之趣御門主大ニ被為入驚、且御奉行所不浅御苦労之程畏り思召、役人共ニおゐても甚以恐入難有奉存、早速取治として上京仕候寒松寺・実相寺之手元相しらへ候処、不行届義も御座候而手間取候段被為対公儀被為恐入、旁以旧冬右両寺閉門被仰付、猶又公儀被仰出之趣御敬承被成、早速夫ゝ江被仰付被相糺候上、取治方之儀別紙（八印）之通御伺被成候、元来双方共我執強御座候得者、一方を鎮メ候得者一方者起り立、下地興正寺一件ニ付所ゝ改派企之風聞御座候上、此度法義差縺互ニ邪争ひ候事故、我執不相立候方ハ一方江対し無面皮存改派企可申、右之趣ニ而興正寺一件与法義筋と相混し候ニ付、甚取計ニ迷惑仕候儀ニ御座候、若又此上諸国門末共其国ゝニおゐて騒立、其御領主江訴出候儀ニ御座候ハヽ、美濃国之通ニ騒立、又ゝ公儀御沙汰ニ相成可申哉、左候時者被対公儀重ゝ被恐入候御儀と、此段も御門主御苦慮被成、別紙取計方を以御伺被成候、右伺之通取計候ハヽ、美濃国之儀者相鎮可申候、乍然一方ハ右申上候通騒立其御領主江訴出、又者改派等企可申も難計御座候故、此等之趣も被仰達候事ニ御座候、何分別紙を以申上候通祖師以来一途之安心ニ御座候処、双方相争ひ古義・新義と名目を附ニ途ニ引分れ候様申立候段不埒ニ御座候、右体之儀ハ学頭浄教寺職柄に付早速取鎮可申処、全我執差挟不及貪着段不届ニ付、先ツ学頭職御取上預ニ被仰付置、其上去十一月被仰出之次第を以吟味仕候、勿論去年美濃国江被差向候使僧ハ去冬為引払申候、猶此度宗意ニ途（ニか）被申成候起り等別紙（ロ印）を以申上候、此上者急速相糺し候而可申上候、以上

本願寺築地輪番

亥正月　　光恩寺

イ印

抑浄土真宗念仏往生の一途ハ、弥陀本願之正意、釈迦説教之本懐にして、末代濁世愚悪の凡夫、一期頓悟之要術なれ

は、三期の列祖連〻相承して、各此一宗を興行す、爰に我高祖親鸞聖人特ニ釈迦七祖之正意を探りて其勧候処、唯一念帰命の他力信心を以本とし給ふ、而して第八世蓮如上人此信心のすかたをのへて、諸〻の雑行雑修自力の心をふり捨て、唯一心に阿弥陀如来今度之我等か一大事之後生御助ケ候へと頼む一念に、往生を治定すと勧メ給ふ、爰を以当流相承の一途ハ唯一念帰命之他力信心を以本とす、然るに近頃当流門人の中におゐて、放侭ニ自之学才を以真宗安心之正統を申乱す之族是多し、今しハらく略して其計を挙けハ大ニ分て一類とす、一にハ一念帰命之行者弥陀を頼むに、其姿又身口に顕れて自ラ三業の具するあれハ、是を執して意ニ実ニ弥陀を頼めハ必す身口ニ顕るへしと申募りて、或ハ其徒弟之中ニ是を骨張して、行者を教るニ殊更ニ是を仏前ニ引て、今日ゟ後生助け給へと意のことく身ニも合掌恭礼の相をかし、口にも助け給へと言葉を述て頼されハ、実の帰命ニあらすと言て身口意三業の儀則を穿ち、又ハ其頼し年月日時を覚されは、真の信心にあらす抔と誣るものをも、是なを当流之常教ニ背すと差免す類ひ有、是を外より称して三業家と云なり

二には当流之信心と云は、願力の不思議を聞て疑ひはる、も信心也、又後生助け給へと弥陀を頼むも信心なれハ、偏ニ助け給へと頼めと計勧るは新流なりと云、甚敷ニ至りてハ唯聞信無疑を信心と計執して、当流の肝要たる帰命の一念を廃棄する類ひあり、是を外より総して呼て聞法家と云なり

右二類之中三業家は聞信家を疑して祖門の逆徒なりと云ひ、又聞信家は三業家を笑て近来の新法門なりと云て、相互ニ我執を募りてうつくしく当流の実義を得る事あたハす、誠に祖師親鸞聖人より代〻之御門主相承之一途ハ、唯頼一念の処肝要より何そ聞信無疑に留りて帰命の一念を廃すへけんや、又助け給へと頼む一念は衆生能帰の心念なれは、何そ三業の儀則を穿鑿すへけんや、二類の異計第一ハ過きたり、第二ハ及ハす如斯各過不及僻執を抱ひて、真宗一派の正統をくらます段大ニ歎敷思召候而、旧臘廿七日在京之門末被召呼、御門主御直に当流相承之正義を懇に御演説在之候儀ニ御座候、以上

ロ印

法義筋差縫趣意書

一宝暦年中越前国ニおゐて十劫の邪義と申す秘事法門を勧て、門末を惑乱仕候もの御座候ニ付、前ゝ御門主ゟ時の学頭泰通院義教江被仰付、其節之学者道粋・僧僕・功存等三人を以此邪義を糺明致シ候処、遂ニ其迷妄を糺し、同壬午年二月晦日・三月朔日両日、平乗寺功存法談を勧候而其事平穏仕候、此時功存右法談之旨趣を以願生帰命弁と申書を著述仕、学林之臈満江遣候処、道粋・僧僕両人等是を議し、是非を問答仕、道粋則右之帰命弁ニ随喜之(序カ)席を認、功存之門人暢道・廉渓・玄仗等是を印刻仕候、其後功存学頭職被仰付、又越中善行(巧カ)寺僧鎔と申者宗学ニ秀候而為法之志深きニ付、御門主ニも功存之次職者必此僧鎔与被思召重く御用ひ被成、功存・僧鎔共ニ学林を治メ、諸国門末宗学研究を致し候処、天明年中僧鎔病死仕候ニ付、自然与僧鎔門人ハ衰へ、功存之門人ハ盛ニ而、門人多くハ帰命弁を取用、漸ゝニ三業抔之沙汰をいたし候ニ付、僧鎔之遺身何となく功存之学頭職并弟子等之盛なるを偏執仕り、僧鎔之高弟河州西念寺道隠ニ依怙仕、学林江背、別ニ宗学を研究仕候姿ニ罷成候、依之功存之弟子よりハ僧鎔之遺身道隠并門人を実解

者と称し、又道隠之徒弟よりハ学林之もの共を三業者与申、是ニ乗して天明七未年興復記与申書を著述仕、帰命弁を破斥仕候もの御座候、夫より起り者段ゝ書を著述仕相互ニ破斥仕候、是等ハ畢竟所化共之私を以対論仕、宗学を研究仕候儀ニ而、本山ニおゐて取用候儀ニ而者無御座候、然ル処寛政年中前学頭平乗寺功存病死仕候、尤其以前ニ跡学頭職之儀者浄教寺智洞可然旨、功存ゟ内密遺書を以御門主江申上置、学林之輩も是を希ひ、万一後職西念寺道隠江可被仰付哉与騒動之色を萌し候処、智洞江後職被仰付候、依而道隠之徒弟弥学林江服徒(従カ)不致、智洞門人も又道隠之徒を仇之ことくニ嫌ひ、相互ニ法難を論し候ニ付、始終本山之故障ニ茂相成へく歟と役人共至而致苦慮、何卒智洞・道隠和熟いたし、共ニ本山之相承を護持し、学林を静謐ニ相治メ度、内ゝ取扱致させ候得共、莵角双方共人我を張、調和不仕、然共智洞・道隠并弟子等不和之事本山江申出ルもの無之候故、急度本山より難被及沙汰、御門主ニ茂御苦慮被成、役人共ニ茂迷惑仕、彼是心配仕罷在候処、一昨酉年夏中末寺共互ニ相争ひ候趣意并宗意之儀別紙を以申上候、右之趣ニ付一昨年十二月廿六日浄教寺智洞・西念寺道隠江御咎被仰付、翌廿七日在京之門末江別紙之通御門主教示被仰渡候儀

ニ御座候、以上

ハ印

伺書

五十三

学頭浄教寺智洞取計方左之通

一兼而学頭職蒙仰、諸国御末寺所化為師範之処、一昨夏学林ニおゐて所化修学研究之節、法義筋ニ付所化騒ゝ敷申立候得共、取鎮不申段学頭職ニ有之間敷不埒ニ思召、一昨冬御察当之上御咎被仰付置候処、取鎮役之もの共より右御咎御免之儀度ゝ歎出候ニ付、強而御聞済無之候ハヽ所化共騒立候様ニ相聞、興正寺一件御吟味中騒立候而者、被対公儀江如何敷思召、彼是以去春御咎御免有之候、然ル上ハ去冬被仰出候御教示之趣を以、早ゝ夫ゝ江利害申聞、急度取鎮可申筈之処曽以無其儀、全我執致骨張不及貪着儀与相見へ、依而弥美濃国門末不相治、既又候此度別紙之通従公儀被仰出、実以御門跡様御苦慮被成不浅御心配之事ニ候、尚又右公儀被仰出之趣致伝聞、其方同志之もの共之内ゟ呼登セ候儀与相見へ、去冬月迫之時節ニ至騒ゝ敷、諸国法中数多上京有之不埒之取計ニ候、実ニ聊無我執候ハヽ学頭之職柄を以利害申聞取鎮、早ゝ帰国申渡候様取計可申処、不及貪着段不埒之至ニ候、此度公儀被仰出之趣も有之、旁以難被為捨置候ニ付、学頭職御取上何寺江御預ケ置、追ゝ法義筋御しらへ可有之間、此旨可相心得様申渡候事

尤法義之筋相しらへ、其筋不正義ニ候ハヽ御門主教示之趣為申聞、改悔仕候ハヽ請書取之、於自坊厳敷閉門申付、万一御門主教示を拒邪義之筋ニ落着仕候ハヽ、脱衣追放申付候事

取鎮役七人之末寺共取計左之通

一先達而学林所化法義筋取鎮役被仰付候処、各御請申候上ハ夫ゝ江利害申聞、取鎮可申筈之処曽而其験し不相見、猶又去度(豆カ)中学林ニおゐて義窮講釈之節、三業之儀及穿鑿候由、其方共日ゝ出席之事故不存儀ハ有之間敷、縦令三業穿鑿与申程之儀ニ而無之候共、争論之時節不穏講談ニ候ハヽ義窮江(ママ)亥談申聞、故障無之様取計可申之処、不及貪着候段全智洞を囲ひ候取計故、美濃国門末弥不相治、依而別紙之通従

公儀被仰出候ニ付、御門跡様至而御苦慮被成不浅御心配之御事ニ候処、右従公儀被仰出候趣致伝聞候同志之もの共内ゟ諸国法中呼登セ候事と相聞へ、去冬月迫之時節至騒ゝ敷法中数多上京有之不埒之取計ニ候、実ニ我執無之候ハヽ取鎮役柄を以取鎮、帰国申渡候様取計可申処不及貪着段不埒之至候、依之取鎮役御取上町役所ニ御差留置、追ゝ御しらへ可有之間、此旨可相心得旨申渡候事

尤御門主被仰出候御教示之趣為読聞、納得之上者請書為差出、若不納得之由申拒候ハヽ前顕之通取計候事

越中義霜召呼候事

一右義霜上京仕候節、去夏学林ニおゐて講釈之上、三業之儀令穿鑿候趣等相しらへ、其筋不正義ニ候ハヽ御門主教示之趣為申聞、改悔仕候ハヽ請書取之、帰国之上慎申付候、万一御門主教示を拒邪義之筋ニ仕候ハヽ、脱衣追放申付候事

河内西念寺召呼候事

一右西念寺道隠上京仕候節、宿預ケ申付置、法義之筋相しらへ、其筋不正義ニ候ハヽ御門主教示之趣為申聞、改悔仕候ハヽ請書取之、於自坊閉門申付候、若御門主教示を拒、万一邪義之筋ニ落着仕候ハヽ、脱衣追放申付候事

但右しらへ之節、学頭浄教寺智洞法義之筋与西念寺道隠法義之筋義解ニ渡り候節者、其品ニより双方江対談申付候事

右等之吟味都而是迄役僧共江被仰付候得共、先達而法義筋しらへニ付、役僧共無念之取計御座候故、此度之年寄共直しらへニ仕候事、尤法義筋義解ニ拘り、其品ニより俗役之もの難相弁儀有之候ハヽ、役僧共又者末寺共之内へ被仰付、年寄共出席いたし候事

美濃国門末取鎮取計方左之通

一大垣御城下ニ罷在候役寺縁覚寺方迄御使僧被差向、同国門末共相招、学頭浄教寺智洞学頭職御取上之儀并取鎮役七人とも境内町役所ニ差留置、法義之筋追ゝ御しらへ可有之趣意申聞セ候上、彼国門末共一昨夏以来相願候摂州十三日講江被差出候裁断書相渡遣し、猶又去冬御門主被仰渡候教示之趣為読聞利害等申聞、納得之上者一統請書為差出候事、右之通之次第ニ取計候ハヽ相治可申哉ニ奉存候事、乍然同国門末共之内ニ浄教寺智洞江同志荷担之もの有之候得共、其者共儀者騒立可申故利害申聞セ候共請書拒可申哉、若右

躰之もの御座候節者無拠咎申付、其寺ゟ共之御領主・御地頭江其段御達申入置、猶亦追而再応利害申聞候而、改悔仕請書差出シ候ハヽ右咎差免し遣、万一何程利害申聞候共我執骨張仕、請不申候ハヽ無拠寺法之通取計仕候事

但先達而美濃国法義筋調懸り之役僧大雄寺・護念寺・法輪寺取計方之次第相糺候処、不埒之取計御座候ニ付、先達而御咎被仰付置候得共、去ル夏縁覚寺等上京之節右役僧共取計候趣、今一応縁覚寺江右使僧より相尋させ、其品ニより猶又右役僧再吟味仕候事

閏正月九日

西本願寺輪番

一依召参上　　光恩寺

右申口之趣鉄三郎相糺之

同十日

一今日登城之上、左之心覚之趣御右筆江懸合置

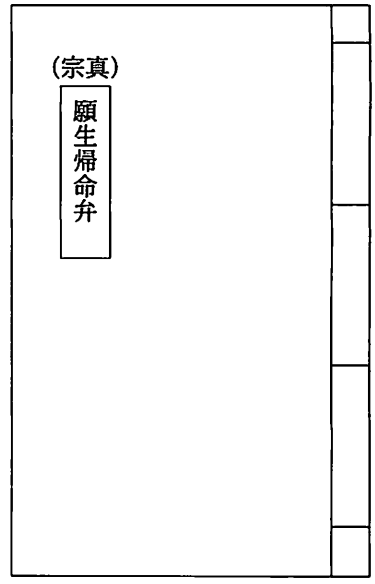
西本願寺宗意之儀ニ付、輪番光恩寺去冬上京之処此節出府、委細之趣書面ニいたし差出候処、右書面之趣品ニ入組候儀も有之候ニ付、追ゟ相糺申口之趣も為書留、其上ニ而勘弁いたし申上候積ニ付、申上之儀少ゟ手間取可申段懸合之事

閏正月十一日

西本願寺輪番

一　　光恩寺

右依召参上并一昨日相達置候宝暦年中功存与申もの著述いたし候書籍願生帰命弁二冊、当学頭浄教寺智洞著述之入門六條壱冊差出之



此書ハ板本ニ而上下有之、本長キ書故別段写等者不致候事

亥閏正月十一日差出ス

入門六条

五十五

浄教寺自督安心示門弟中六箇条天明丙午之篇目

一真宗一流ノ御勧化ノ趣ハ、後生ヲ一大事ト思ハヽ、御文章ニ改悔文ノ如ク、モロ〳〵ノ雑行雑修自力ヲステヽ、阿弥陀如来ヲタノミ奉ル一念御タスケ一定ト領解シテ、報謝相続スルヨリ外ニ別途アルヘカラス

一ソノタノミ奉ルト云ハ、我等コトキノ凡夫ハ弥陀如来ヨリ外ニ後生ヲタスケタマフ方ナキヲ聞テ、一大事ノ後生ヲタスケタマフ真実ノ如来ニ向奉リ、後生ノ一大事ヲ御タスケ候ヘト、仏ニマカセ奉ル一念ニ往生決定ト疑ナキヲ、一念タノムトモタノム一念トモノ玉フナリ、ソノタノムスカタハ身口ヲ兼テ示シ玉フ処モアリ、又意業ハカリヲ示シ玉フ処モアリ、三十人ノ見聞スルコト也、我身ノ後生ヲ一大事ト思ヒ、ソノ機ヲヨクシロシメス仏ヲフカク敬信ノコヽロニアレハ、所帰ノ阿弥陀如来ニ能帰ノ心ヲモテ直対スルコヽロアルヘシ、シカルトキハ自ラ身口ニ発ルモアリ、又身口ニ発スコトノナキモアリ、面々自知アルヘキ事也、偏ニ身口ニ発スルヲ廃セントスルハ御文章ノ教ニ背ケリ

一小児代皈ノコトハ古例ナリ、コレハ長大迄ノ存命ハカリシラレスユヘ、父母ノ慈悲ヨリタノムコト也、ソノ子モシ事ヲ弁スルマテ存命セハ、ツフサニ当流ノ常教ヲ教ヘ聞スヘキコト也

一世ニイツトナクワレシラス自然ト信心ヲウルモノナリトイ

ヘル人アリ、ソノ人ニアリテハ往生ノ本意フトク(ヲカ)ヘキヤ
ハシラサントモ、御相承ノ教ヒ日ニハ背ケリ、タノム一念
ノトキ御タスケ一定ト決信スルヲ真宗ノ正義トス、ソノ一
念発起ノ年月時日ヲシルヤシラサルヤノ沙汰ニ及フヘキコ
トニハアラス

一モシマヘニタノミ奉リシコトモアリトイヘトモ、雑行雑修
自力ノ疑心ヲハナレスト云人アラハ、ソノ人ハ当流ノ御
スヽメヲイマタ聞信セサル人ナレハ、コレ不信心ノ人ト云
モノ也、右ノ如キ人ナラハトクト御文章ヲ聴聞シテ、教ノ
コトク一念皈命シテ御タスケ一定ノ信ニモトツクヘシト
スヽムヘシ、外ヨリソノスヽメヲ聞テタノミナヲシナト嘲
ルハ悪キ評ト云モノ也、ソノモトヨリノ心得ハ、当流ノ正
義ニアラサルユヘ、今正ク改悔スルト云モノ也

一私ハ御タスケ候ヘトタノミシコトハナケレトモ、往生治定
ト落居シテヨロコフトモノ有、ソノ人ノ往生治定ト落居ス
ルトハイカナル教ヒ、ヨツテイカヤフニ領解セルヤウノ落
居ノ心中ハシラスコトナシトモ、全ク御文章改悔文ニハ筋
チカヒナル言也、御文章改悔文サヘ聞イレス人トハ苦口ニ
論ルニ及ハス、モシ強テスヽムルト却テ誹謗ノモトヒナル
コトモアルヘシ、彼等モ屹イタリテ後生ヲ一大事ト思ヒ、
御文章ヲ聞信スルコヽロアテハタチマチニ正教ノ如ニナル
ヘキ事ナレハ、互ニ人我ヲ加ヘサルヤウニ弘通スヘシ、御
文章改悔文ノ正教ハ白日ノ晴天ニカヽルカ如シ

浄教寺　智洞誌写

右入門六条と申書従本山当山掛所へ差越不被申候、然所濃
州申立之中此書名御座候、依而御尋ニ付致詮議候処、御地
中浄立寺致所持罷在候ニ付、借受写取差上申候

築地本願寺輪番

亥閏正月　　光恩寺

寺社

御奉行所

右三冊役人請取置之

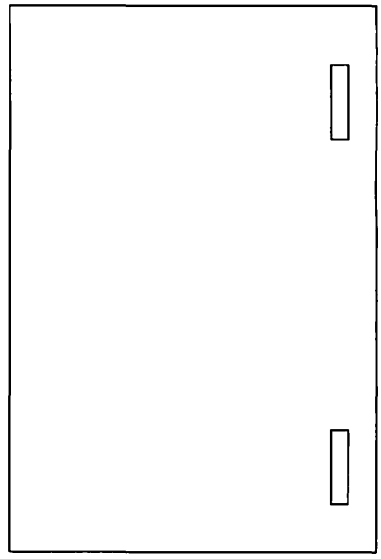
一星野鉄三郎、光恩寺申口之趣承糺之

一今日差出候願生帰命弁之内、三業頼之儀記有之并入門六條
江も三業頼之儀急度相認候ニハ無之候得共、矢張三業頼ニ
相響候文言も有之、祖師ゟ相承ニ違ひ申候段光恩寺申立候
ニ付、左ニ候得者右両條之書籍之内、相違之処委細書取差
出候様以役人相達之

閏正月十二日

西本願寺輪番　光恩寺

一左之帳面壱冊差出之



帰命弁之事御尋ニ付左ニ申上候

帰命弁ニ云

五帖ノ御消息ニ、阿弥陀如来ニ向ヒタテマツリ後生ヲスケタ(タカ)マヱトタノミ申ト、又カヽル機マテモタスケタマヘルホトケハ阿弥陀如来ハカリナリトシリテ、何ノヤウモナクヒトスチ

五十六

ニコノ阿弥陀如来ノ御袖ニヒシトスカリマイラスルオモヒヲナシテ、後生ヲタスケタマヘトタノミ申セハ、コノ阿弥陀如来ハフカクヨロコヒマシマシテ等ト、然ハ善知識ノ教ニマカセ、身業仏ニ向ヒ合掌敬礼シテ、口業ニ阿弥陀如来ワカ一大事後生タスケタマヘト白シ、心ニ念スルト、口業ノ如クカヽル出離ノ縁ナキモノヲタスケタマヘト一心ニ帰命スルコトキ、御タスケ一定ト信シテ疑ナキヲコソ今ノ帰命スカタトハイフヘシ、然トモサマサマノ縁ニヘタテラルヽコトアリテ、身業礼敬ノカナハス人モアルヘシ、口業ノ発語ニ及ハレヌモアルヘシ、独り自ラタノム人モアル人シ(ヘカ)、師僧又母同行ノ授ニヨルモアルヘシ、或ハ仏閣道場、或ハ病床山野ニテタノムモアルヘシ、ソノ時処諸縁ニカヽワルコトハナキナリ、サレトモ何ノ障縁モナカランモノハ必々仏前ニムカヒ三業を表スヘキコトナリ

此五帖之御消息之中ニ向ひ奉るとあるハ、身業(スガタ)にて向ふ事ニ而無之、経文ニ一向専念無量寿仏ト有之、御文章之中一心一向与有之候一向之事ニ而、身業ニ而弥陀を頼む証拠ニ者不相成由、又善知識之教にまかせ、身業仏に向ひ合掌敬礼等与有之文言理に不相叶、善知識御教示之趣ハ唯一念ニ弥陀を頼むと被仰、口業とも身業とも無之故、三業帰命を申募り候ハ、新義なりと一方ら申立候儀に御座候、抑此帰命弁と申書ハ、十劫秘事之不正義を対破い

たし候書に候得者、弥陀を頼む事をすゝめん為に三業帰
命之及沙汰ニ候儀と相見へ候、医師病を見込瀉薬を与へ
候道理ニ而、其病を破外いたし候書に御座候故、右破外
之書物に御座候、依而害ニも不相成様被存候

一入門六條之事御尋ニ付左ニ申上候

入門六條ニ云

一大事ノ後生ヲタスケントマチワヒタマフ如来ニ向ヒ奉リト
アリ

此向ひと申も一心一向之事にて、身(スガタ)にて如来に向事にあ
らす、心ニ而向ふ事と申立候、次之文ニ云ク

ソノタノムスカタハ身口ヲ兼テススメ玉フ処モアリ、又意
業ハカリヲ示シ玉フ処モアリト云

身口を兼而勧め玉ふ事は曽而無之、当流之定教ハ一念帰
命より外に弥陀の頼様無之与申立候

又次之文ニ云

偏ニ身口ニ発スルヲ廃ントスル人ハ、御文章ノ教ニ背ケリ

此儀者聞へかたく、御文章ニハ何れ之処ニも一念に弥陀
を頼むと被仰候而、身口揃へて弥陀を頼むとハ無之、病
眼ニ人りの空花を見る如くニて、御文章之御文之伺ひ様

不当与申立候儀ニ御座候

右申上候通一方より申立候、右等は於本山に双方とも篤与
相しらへ候得者可相分義ニ御座候、以上

亥閏正月

閏正月十三日

一今日立合ニ付評定所江出席、同役衆江左之心覚之趣及演説
候

西本願寺派宗意一件取調之儀、甚差急候儀ニ付、星野鉄
三郎日ゝ私宅江罷越候付、御銘々御□江当分之内罷出兼
候段演説およひ候事

西本願寺輪番

一依召参上　光恩寺

右星野鉄三郎ゟ申口之趣相尋之

一当時三業方并聞信家信し候もの、諸国ニ而何れ之方多有之
候哉、書付ニいたし差出候様相達候処、即刻左之書面差
出之

越前・近江・大和・京地

右四ヶ所多分三業家ニ而、聞信家者少き由ニ候

濃州三百ヶ寺程有之候内、二百五十ヶ寺程者聞信家、五拾

ヶ寺程者三業家之由ニ候
芸州多分聞信家ニ而、三業家者少き由ニ候
播州者大躰濃州ニ類し三業家少し、聞信家多キ由
豊前・豊後・筑後・筑前抔、大躰聞信家之由ニ候
讃岐聞信家多く、三業家少き由
摂州・泉州抔者入組有之候
越中・能登三業家多く、聞信家少キ由
右兼而及聞罷在候まゝ申上候、勿論通漫之事ニ而慥成儀者
難申上候得共、先加様存罷在候故、貴公様迄申上候間、其
御心得ニ而御聞置奉希候、以上

閏正月十三日　　光恩寺

塩山小源太様

一左之書付以役人相達之
一去酉年摂州十三日構（ママ）被相達候高判書
一同年在京之門末江被相渡候教示書之事
一美濃国為使僧西光寺江門末ゟ差出候書付
一去ル酉年学頭浄教寺智洞并道隠、御門跡ゟ咎被申付候由、
右申渡書
一御文章之事

五十八（九）

右写可被差出候事

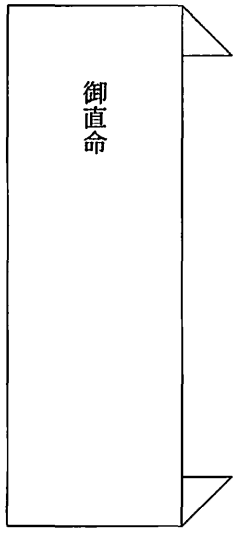
閏正月十五日　　築地本願寺輪番

一依召参上左之書面差出之　　光恩寺

□　□
願書控
伺書控

此書面之趣、戌十一月十九日戸田采女正殿家来ゟ差出候書
面与同様之儀ニ付、爰ニ略之

六十



此書面戌二月十一日差出候書面与同様故、略之

亥閏正月十五日差出

改悔文

御文章

六十　六十一

もろ〳〵の雑行雑修自力のこゝろをふりすてゝ、一心に阿弥陀如来我等か今度の一大事の後生御たすけさふらへとたのミまうしてさふらふ、たのむ一念の時往生一定御たすけ治定とそんし、このうへの称名は御恩報謝とそんしよろこ

ひ申候、この御申登なり、聴聞申わけさふらふ事、御開山聖人御出世の御恩次第相承の善知識のあさからさる御勧化の御恩とありかたくそんし候、このうへ者さためおかせらるゝ御おきて一期をかきりまもりまうすへく候

本願寺釈法如判

右領解出言之文ハ信證院蓮如師之定おかせらるゝ所也、真宗念仏行者已に一念帰命信心発得せる領解の相状也、是故に古今一宗の道俗時ゝ仏祖前にして、この安心を出言し、自の領解の謬なきことを敬白するなり、然るに間(マヽ)其後生の一大事を軽忽し、自らたしかに弥陀をたのミたる一念の領解もなく、亦この領解文をも記得せさる類あり、甚悲歎すへきところなり、こひねかわくハ一宗の道俗この出言のことく一念帰命の本源をあやまらす、如実相応しく速に一大事の往生を遂へきものなり、この故ニ今ひろめおきし蓮師の真讃を模写し、印刻して家ことに伝へ、戸ことに授て永く浄土真宗一味の正意を得せしめんと思ふもの也

天明七丁未年四月釈文如識之判

ソレ五劫思惟ノ本願トイフモ、兆載永劫ノ修行トイフモ、

タ、我等一切衆生ヲアナカチニタスケ給ハンカタメノ方便
ニ、阿弥陀如来御身労アリテ南无阿弥陀仏トイフ本願ヲタ
テマシ〳〵テ、マヨヒノ衆生ノ一念ニ阿弥陀仏ヲタノミマ　六十二
イラセテ、モロ〳〵ノ雑行ヲステヽ、一向一心ニ阿陀（弥脱）ヲタ
ノマン衆生ヲタスケスンハ、ワレ正覚トラシトチカヒ給ヒ
テ、南无阿弥陀仏トナリマシマス、コレスナハチ我等カヤ
スク極楽ニ往生スヘキイハレナリトシルヘシ、サレハ南无
阿弥陀仏ノ六字ノコヽロハ、一切衆生ノ報土ニ往生スヘキ
スカタナリ、コノユヘニ南无ト帰命スレハ、ヤカテ阿弥陀
仏ノ我等ヲタスケタマヘルコヽロナリ、コノユヘニ南无ノ
二字ハ衆生ノ弥陀如来ニムカヒタテマツリテ、後生タスケ
タマヘトマウスコヽロナルヘシ、カヤウニ弥陀ヲタノム人
ヲモラサススクヒタマフコ、ロコソ、阿弥陀仏ノ四字ノ
コヽロニテアリケリトオモソ（う）ヘキモノナリ、コレニヨリテ
イカナル十悪五逆五障三従ノ女人ナリトモ、モロ〳〵ノ雑
行ヲステ、ヒタスラ後生タスケタマヘトタノマン人ヲハ、
タトヘハ十人モアレ百人モアレ、ミナコト〳〵クモラサス
タスケタマフヘシ、コノヲモムキヲウタカヒナク信セン輩
ハ、真実ノ弥陀ノ浄土ニ往生スヘキモノナリ、アナカシコ
〳〵

摂州十三日講江之御高判

被仰出之趣

祖師聖人御相伝ノ趣ハ、他力真実ノ信心ヲモテ肝要ト教ヘ
玉ヘリ、ソノ信心ヲトルヘキヤウハ、御代々善知識御教導
ノ通リ御文章改悔文ヲ亀鑑トシ、モロ〳〵ノ雑行雑修自力
ノ心ヲフリステヽ、一心一向ニ後生助玉ヘト弥陀如来ヲタ
ノミ奉ル一念ニ御タスケ一定ト領解シ、ソノウヘニハ称名
念仏シテ報謝相続スルハカリナリト、タシカニ聴聞マフス
ウヘハ、自行化他トモニコノ外アルヘカラス、ソノタノミ
奉ルスカタハ、本願成就ノ弥陀如来ニ後生タスケ玉ヘト帰
命スルヲモテ、本願ヲ信楽スル体トス、コノ能皈ノ心所帰
ノ仏智ニ相応スルユヘニ、一念帰命ノ往益ヲ成セシメ玉ヲ、
ソノ帰命ノ一念ヲモテ往生治定ノ時剋トサタメ、一形憶念
ノ名願ヲモテ仏恩報謝ノ経営トス、コノ一念帰命ノ信心ハ、
三業ノ儀則ニカヽハルヘキニアラス、モトヨリ後生ヲ一大
事トオモヒ、一念帰命ノトキ往生サタマリシコトヲ、歓喜
スル人ニオイテタノミシ年月日時ヲ沙汰スヘキコトアラス、

カノ一念帰命ノトキヲ至心信楽欲生ノ三信トイヘリ、コノユヘニ三信トハイヘトモ、弥陀ヲタノム行者帰命ノ一心ナリト仰ラレタリ、コノウヘ義解ニワタリテハ、大法荘厳ノコヽロサシヲモテ人我ヲヤメ、学林ニオイテ研究スヘキモノナリ

酉二月中旬

六十三

両寺申渡之書付写

去ゝ酉十二月浄教寺智洞并河州西念寺諦忍江被仰渡之写

浄教寺智洞

近年於諸国安心之趣種ゝ不同之沙汰有之上、別而当夏以来御末寺之輩法義筋ニ付追ゝ伺願等有之、甚以不穏品故今般別紙之通御裁判被仰出候、就夫其方儀御一宗学頭被仰付置候得者諸国御門末令叛伏、兼而被為定置御掟目之通御末寺一統学林懸席之上、如実ニ学業相励、林中及繁昌候様可致指揮筈之処、従来之趣ニ而者右躰之姿曽而不相見、殊ニ当夏所化中彼是不穏次第有之、加之俗輩迄も令雷同候段者甚以御不審之御沙汰に候、其上公武并諸宗江被為対候而も、御本山御外聞ニ茂相拘り、第一御正化御弘通之御故障ニ相成候条、畢竟其方職分ニ有之なから所化中取治方不行届、人我を以内外不束之取計ニ相聞へ、一統不令帰服役前之所詮無之ニ付、御糺明之上厳重之御咎可被仰付之処、御慈悲之御沙汰を以於自坊遠慮被仰付候間、急度相慎可罷在候事

酉十二月

河州
西念寺
諦忍

近年於諸国安心之趣種ゝ不同之沙汰有之上、当夏以来御末寺之輩法義筋ニ付追ゝ伺願等有之、彼是不穏品ニ付今般別紙之通御裁判被仰出候、就夫其方儀常ゝ宗学令研究候身分ニ候得者、同朋社中之輩江も如実為法之心底を第一として令談合、前来被為定置御條目之通学林懸席之上、穏ニ令勤学候様精ゝ可取計筈之処、従来之趣ニ而者右躰之心得曽而不相見、別而当夏諸国同志惣代と称シ、記名帳面を以強訴躰ニ願出候始末、其外其方社中之由ニ而追ゝ騒ゝ鋪願等差出し、至而不穏成次第、公武并諸宗江被為対候而も御本山

御外聞ニ茂相拘り、第一御正化御弘通之御故障ニ相成候条
寔以可奉恐入事ニ候、右者其方社中ニ候得者於其方不存と
申儀無之趣ニ相聞、甚以不埒之至ニ候、前段之通其方社中
江対し如法之心底を以精々取押へ、若不相用輩茂有之候
ハヽ、其段御本山江相訴、御沙汰を可奉願筈之処、右躰之始
末乍存其侭ニ差置候趣ハ、却而其方人我を以て申談候筋ニ
相当、甚以御不審之至ニ候、仍而其方身分御糺明之上厳重
之御咎可被仰付筈之処、御慈悲之御沙汰を以於自坊遠慮被
仰付候間、急度相慎可罷在候事

酉十二月